

大賞

「この子の物語」 たけみやもとこ

優秀賞

「痛み」

森 水希

「愛別離苦の計略」 水田 修

「天萌ゆる」

苛屋

第10回熊本大学

東光原文学賞作品集



2018年3月発行
熊本大学附属図書館
Kumamoto University Library

第十回熊本大学東光原文学賞作品集

第十回東光原文学賞作品集 目次

館長のことば

熊本大学附属図書館長 高宮 正之 / 4

第十回東光原文学賞作品集の公刊にあたって

大賞

この子の物語

たけみや もとこ / 7

(文学部総合人間学科三年)

優秀賞

痛み

森 水希 / 40

(文学部総合人間学科二年)

優秀賞

愛別離苦の計略

水田 修 / 66

(大学院自然科学研究科機械システム工学専攻修士課程二年)

優秀賞

天萌ゆる

苛屋 / 101

(文学部文学科三年)

選考を終えて

跡上 史郎 「東光原文学賞総評」 / 127

松岡 浩史 「講評」 / 130

岩瀬 茂美 「講評 ワイルドサイドを歩け」 / 133

第十回東光原文学賞作品集の公刊にあたって

附属図書館長 高 宮 正 之

附属図書館では、平成二十九年度も本学学生（学部生、大学院生、留学生等）を対象とした「東光原文学賞」を設置し、作品を募集しました。本文学賞は、今年度で節目の十回目となりました。六月一日から募集を始め、十一月六日を〆切とし、十二月十三日に三名の先生方による選考委員会が開かれて受賞者を決定し、センター試験前日の一月十二日に授賞式を終え、こうして上梓することで一連の事業が完了しました。授賞式では、大賞一名と優秀賞三名に表彰状と副賞が手渡され、各選考委員からの講評、記念撮影や新聞記者からのインタビューなどが有り、受賞者は笑みを浮かべながら喜びを語っていました。入賞された皆様に改めてお祝い申し上げると共に、惜しくも選に漏れた方や今年度応募されなかった方、来年度の更なる挑戦を歓迎します。選考委員会メンバーとして短期間内での作品選考をお引き受けくださった、跡上史郎委員長（本学教育学部）、岩瀬茂美委員（熊本日日新聞社編集委員兼論説委員）、松岡浩史委員（本学大学院人文社会科学研究所）の三先生に厚くお礼申し上げます。また、通常の職責に加えて、この事業のために多くの時間を割いて下さった附属図書館関係各位の労をねぎらいたいと思います。

本年度は十三編と応募作品がやや少なく、学部学生からの作品は九編で、十年間で初めて文学部生のみからの応募となりました。大学院生では、今年も教育・自然科学・医学から四編の応募がありました。昨年度は、文・法・教育など文系だけでなく、理・工・医・薬の理系を含めた全学部から、また大学院生から、合わせて二十八編の応募作が有り、第一回の東光原文学賞に次ぐ応募数だったので、本年は少々残念でした。昨年は震災直後からの募集で、心の中を表現したい気持ちも強かったのでしょうか。創設当初の本文学賞の狙いは、知・徳・情のバランスを備えた人材を育成し、大学生の読書ばなれ図書館離れの流れを押しとどめ、文章作成能力の涵養をはかることだったそうです。そのような意味のスキルアップだけではなく、文学作品の創作や読書が、学生の今後の人生への救いや心の豊かさへの導入に役立つと信じています。震災経験は本年度の応募作品の中にも取り上げたものが有り、時が経つにつれ精神面など様々な間接的なところにまで影響を及ぼしてくると想像されます。文学の虚構の力も心の支えとなり、震災からの復興の一助となるのではないのでしょうか。学生の皆さんの健闘を祈ります。

ところで、本文学賞のタイトルである東光原（とうこうげん）の由来をご存知でしょうか。赤門を入った右手、現在保健センターや中央図書館が建っている場所は、旧制第五高等学校時代に「東光原」という名の運動場でした。「五高五十年史」掲載の昭和十二年の地図には、「体操場（蹴球場）（東光原）」と書かれています。現在、昭和二十年当時の五高の精密な模型を中央図書館一階に展示していますので、ご覧ください。五高竣工当時は、現在の生協の場所も含めて畠だったそうで、明治二十九年に着任した漱石が「いかめしき門を入れば蕎麦の花」と詠んだ場所で、

民間に小作させていたそうです。その後北西の武夫原に遅れて運動場として整備され、当時の龍南健児（五高生）が自由に自主的に教養を深め、体育関係の訓練を積み、自己の意志に基づいて人間形成を行った場所である東光原の名を冠した文学賞なのです。多くの著名な作家を輩出した第五高等学校からの系譜が、現在の熊大生にも引き継がれ、来年度以降も多くの素晴らしい作品応募があることを期待します。



上段：松岡 跡上 岩瀬
下段：堀田 中尾 高宮 宮本 濱田

この子の物語

たけみや もとこ

お母さんが玄関の鍵をかけ忘れてパートに行っていたらしくて、十九時に帰ってきたお父さんはかんかんだった。ユウトも、病気のこの子も残しているのに不用心だ、って。お母さんは二十一時には帰ってくる。今ごろ何を考えていることだろう。出るべきあたし、鍵をかけたかしら。明日もこんな雨かしら。ラップをかけてテーブルに置いていったロールキャベツ、ユウトとお父さんはちゃんと温めて食べたかしら。何でもいい、何も考えないでほしい。部屋の窓を開け、黒雲の毛布を被ってうつらうつらする三日月に、そっと願いをかけた。だって、頭の中が空っぽなときに誰かに怒鳴られることほど、みじめになることないじゃない。

ジョロリ、と窓の上から垂れてきたものが、ぼくのつむじを寒からしめた。うちは五年前にリフォームされたばかりだけれど、工事の腕が悪かったようで、雨の日には多くの部屋の窓を開けると、窓枠に溜まった雨水が室内へ入りこんでしまうのだ。コップ一杯半ばかり、髪と服と床が少しばかり濡れる、ばかり。この現象に気づいたとき、ぼくは、ちょっといやだなあ、と思った。お父さんはびっくり、がっかり、放っておけば家が崩壊する、と言わんばかり。顔を真っ赤にし

ながら、お母さんに、建築会社へ抗議するように、と言いつけた。言いつけられて、お母さんは、はいはい頷くばかり。仏のような笑顔。頬っぺたが震えていた。三者三様の顔色を憂いて、この子は高らかに鳴き、長い尻尾を振った。何度も、何度も。この子、ほんとうに、きみがいなくなったら、お父さんもお母さんもぼくも、今まで一緒にいられたかどうか。世話をしてくれとよく鳴いたのは、いつもみんなのことを考えていたからだろうか。みんながわたしを見て、わたしのことを考えていてくれたら、他のことで悩まなくてすむ。もしかしたらそんな。

一階からお父さんがぼくを呼ぶ。ひゅん、ひゅん、ひゅん。この子の夜鳴きも聞こえる。二人とも困っている。降りてみると、お父さんはサークルの前に座りこんでいて、スポイドを使ってこの子に牛乳をやろうとしていた。今のこの子はほぼ一日じゅう口を開けっぱなしだから、食べ物や飲みものを与えるのは難しくない。問題は、うまく飲みこめないこと。伸びきった灰色の舌に垂らされた牛乳が、窓枠に溜まった雨水のように、口の端へなすすべなくこぼれ落ちていく。充血した眼は飛び出しそうなほど見開かれているのに、どこにも焦点が定まらない。ひたすら怯えている。毛も減って、がりがりに痩せたお腹がひっきりなしに波打っていて、その中で鞭打たれている内臓までぼくの眼に浮かぶ。

ぼくがサークルへ近づくと、この子は大げさにびくつき、黄緑色の眼や二まみれの臉をきつく閉じて、かちかち宙を噛んだ。襲われるって思ったのかな。ぼくの呟きをお父さんが拾う。見えてないし、耳も鼻もずいぶん衰えた、時間の問題かもわからんね。……でも、まだ、ぼくが近づいたって、わかったんだ。敏感だしちっとも衰えてないよ。病気で熱があっても、自分で自分の

身を守ろうとしているんだ、きっと。それとも、番犬として育ったこの子は、家族みんなを守ろうとしているのかもしれない。近づいたばかりに牙をむいたみたいで、さみしかったけど。牙をむかれるにふさわしい、クズのような理由も、実はあるんだ。お父さんには言えないけど。

飲みたくなるときは飲まないからしょうがないよ。ぼくの言葉を聞いてからしばらくして、お父さんは黙ってスポイドを置いた。牛乳を入れた銀の皿と、スポイドを指差し、この二つ洗っておいて、とぼそぼそ言った。ぼくの顔を見ず、ぼくが頷くのを待たず、お父さんは臭う部屋を離れ、さっさと自分の部屋にこもった。……「さっさと」、それは、ぼくの腐った胸がもたらした、さりげない印象操作。お父さんを貶めるだけの言葉。ナンテ冷たい父親デショウ、ボクガオ世話ヲ代ワツテアゲナイトコノ子ガ可哀想、子供ナノニヨクオ世話ヲスルボクハエライ——。他にも山ほど思いつくだらう。自分のみともなさに、涙を流さないようにするためには。

ひゅん、ひゅん、ひゅん！ この子が思い出したように鳴く。何を欲してもなく、鳴く。ごめんなさい、そうせつつかれても、どうしていいか、わからない。鳴きはじめると水も牛乳も飲まないじゃない。恐ろしい？ この子は幻覚を見ているみたいだった。刺激しないようゆっくり屈みこんだぼくの、左脇辺りを、あの狂いだしそうな眼で、必死にねめつけている。死神でも立っているかと思ひ、ぼくは振りむいた。くすんだ壁しかなかった。念のため、スポイドをもう一度この子の口に運んでみた。一滴も飲まなかった。

いつものように、軽く爪を立てて撫でていた。愛情こもった掌をべたべた押しつけられて、毛並みがまっ平らになった、この子の頭頂部から首にかけて。ここの毛だけ少し黒いのよ、ずっと

触ってるうちに色が付いちゃったのかしらね……とはお母さんのお気入りのファンタジーだ。もしほんとうにそうだったとしても、ぼくが色の変化にも、まっ平らな癖の誕生にも貢献できていないのは間違いない。いつも軽く爪を立てて、手が汚れないかびくびくしながら、触っていたのだから。

じゃあね、この子。ちょっとした台詞に重い意味を持たせてしまった気がして、その責任の取り方に爪を立てたまま思い悩む。ぼくは指を伸ばし、掌を使ってこの子を撫で直した。何年振りだったろう。ぼくの胸は生温い達成感で満たされた。そうして撫でられている間だけ、この子は眼を細め、立ちっぱなしだった両耳を穏やかに寝かした。走り過ぎていた呼吸が落ち着き、血の滲んだかさかさの鼻から出るグルグルという異音が静まった。しかし、鼻先のこのどこでこさえたかもわからない擦り傷にしろ、大腿にできた、赤黒く膿んで骨までのぞくむごい床ずれにしろ、噛み合わせが悪くなって、歯石と牙とが絶えず突き刺さって肉の削げ落ちた上唇にしろ、この子の傷のどれも、いくら膏薬を付けたって治る気配すらない。そんな傷が些細なことですべて増えていく。

ぼくは「さっさと」サークルを離れ、台所へ向かう。水を出しっぱなしにし、プッシュ式のハンドソープを十回押し、五分間、手を洗う。肘の辺りまで泡で覆う。三枚のキッチンペーパーで念入りに水分を拭いたあと（タオルと違って一回きりで捨てられるから）、二階へ上がり、ジャケットとジーンズを脱ぎ、除菌ミストを何十回か、もう数えていられないほど振りかける。あんなに臭い部屋にいたんだ。シートに滲みた大小便や、床ずれの傷口から、噎せ返るようなにおい

があふれ出ていたんだ。しかたがない、しかたがない。学校で獣臭いって噂されたらどうする？
どうもしない。

どれだけ綺麗にしたつもりでも、口もとや鼻の下に臭気が留まっている気がする。早くお風呂に入ろう。二十時半にお湯が沸くよう、お母さんがタイマーをセットしてくれている。壁の電波時計は十五分を少し過ぎたところ。着替えを準備したりトイレに行ったりしていればすぐだ。

脱衣所まで来てはっとした。お父さんがシャワーを浴びていた。今入ったらしい。よれよれのパジャマと下着が洗濯機の下に置いてある。お母さんが家にいるときは、入浴前の「おい、着替え」の一言で、わざわざここに持ってこさせるものを、今日は自分で箆笥から引き出した。どんなに汗をかいたと、風呂に入りたいとこぼす夏の日でも、お母さんがパートから帰ってきて着替えを出してくれるまでは、ソファに座ってしかめ面して経済番組を見ていた人が。半透明のドアにシルエツトがゆらゆら踊る。ドアの向こうからは、いつも通りの鼻歌が聞こえる。同じ歌が、いつもより、なんだか物悲しく響くのは、ぼくの心持ちのせいだろうか。お父さんの気まぐれだろうか。なぜか、もうじき帰るお母さんが、鍵のことでこっぴどく怒られる心配を、ぼくはしなくなった。

「このちゃん、ただいま！　ううんそうねえ、きつかったね、うんうん。ユウト、このちゃん今

夜何か食べた？ 牛乳だけ舐めた、そう……」

お母さんは若い。お父さんより九歳も年下だし、精神的にはもっと若い。中学三年のぼくよりずっと、疲れ知らずで生きている。

「お父さんは今お風呂？ ユウトもお世話ありがとう。一人とも見てくれて助かった、このちゃんも喜んでるわ。お母さんが代わるから、もうゆっくりしててね」

ちがう、ちがうよ、この子が喜んでるように見えるのは、弱弱しくも首を持ちあげ微かに尻尾を揺らすのは、ぼくらがそばにいたからじゃなく、お母さんが帰ってきたから。ぼくはろくにリビングへ降りてこなかった、ロールキャベツも白飯もお味噌汁も、お父さんが帰る前に、二階へ運んでこそそ食べた、下にはこの子がいたから。一緒の空気を吸いながら食事をしたくなかった。この子の悲しみにあふれた瞳を、ぼくは見えていらなかった。この子の名付け親で、この子の一生を一番近くで支えてきた人。ぼくが少しでもためらうお世話は、お母さんがすべてしてしまった。だからお母さんは、ぼくが極度の潔癖症であることに、この子をうまく触れないことに、まだ気づいていない。

「ああ、お帰り……」

よれよれのパジャマを身につけたお父さんが、リビングに出てきた。熱いお湯に打たれて上気した顔も、仕事から帰ったばかりのお母さんの笑顔に比べて、ずいぶんくたびれて見えた。感情が何も読み取れなかった。

「……おい、施錠は」

「え、ああ、ほんとに、ごめんなさい！ オオバカモノよね、ユウトに言われるまで気づかなかつたの。急いで家出て、忘れてた」

オオバカモノ、とはお母さんを怒鳴りつけるときのお父さんの常套句だ。先んじて言われたのでお父さんは使いづらくなつただろう。それはお母さんのひそかな作戦だつたかもしれないけれど、今のお父さんにはそもそも声を発する力があまりなさそうだった。

「今後、気をつけるように」

「はい」

珍しく小言を長引かせずに、書齋へ消えたお父さん。事情を知らない人の眼には、滑稽に映る。五十五歳という年齢以上に古めかしい、何時代に流行つたかもわからない亭主関白を引きずる、頑固者の父親。底抜けに明るくて、自分を犠牲にしても争いごとを防ごうとする優しい性格なのに、ときたま自ら火種を撒いてしまう慌てんぼうの母親。いつ、どんな波長が合つて、ついに結婚までたどり着いたんだらうか。もちろん悪いとは思っていない。ぼくは自分をさげすみたくない。ただ、不思議に思う。

「牛乳、少し残ってるね。飲ませてみようか」

あっ。

お父さんが洗っておいてと言っていたんだつた。

「このちゃん、牛乳」

お母さんはスポイドを使わなかつた。この子の頭の下へ躊躇なく手を差し入れ、枕代わりの座

布団に血でべったり癒着していた下顎を宙に浮かせ、銀の皿の中に舌が直接届くようにしてやった。驚いたことに、この子は痛々しい鼻先を白い海へうずめ、浴びるように飲みはじめた。

じゃぶ、じゃぶ、じゃぶ、じゃぶ。

「おいしい？ そう、おいしいの。全部飲んでいいんだよ」

ぼくたちがスポイドであげたときは、全然飲まなかったんだ。それを聞くとお母さんは、ひどく弱々するときにはスポイドじゃないとしょうがないけど、よく知った飲み方であげたほうがこの子も喜ぶと思って、と自分がいっとう嬉しそうに語るのだった。その間にこの子は、皿に残っていた牛乳を飲み干してしまった。お母さんがパート帰りに買ってきたという半生の餌も、あっという間にがっがつ食べつくした。

あきれてものも言えない。今夜にも死ぬのだと覚悟していたのに。安心して腹が立つ。文句を言ってもやりたいほどだ。口からは別の言葉が……。

「なんだ、まだまだ大丈夫だね、よかったよかった」

「ほんとねえ」

「この子って、お母さんからもらったものは何でも食べるよね」

「あら、ほんと、そうかしら。そんなことはないでしょ」

うん、ぼくがそう思ったただけ。

この子が、自分に触ってくれないぼくのが憎くて、ぼくから与えられるものなど一つも要らなくて、お母さんのことはその何倍も愛しているというのなら……それならいい。もし、……

もしもこの子がぼくのことでも、お母さんみたいに大好きなのに、ぼくから避けられていると感じていたとしたら。そんなのって अच्छैयाいけけない、誰もが不幸せじゃない。ぼくはこの子に嫌われていなくちゃいけないんだ。

お母さんが銀の皿を洗い、今度は同じ皿に水を汲んできた。また勢いよく飲みだしたこの子だったが、口もとから細かな皮膚の残骸のようなものがぼろぼろこぼれ落ち、水のなめらかさに混じりはじめた。食物の咀嚼を繰り返しているうち、口角の傷口が徐々に開き、こんな不純物が出てくるのだ。初めて見たときはびっくりして、ピンセットで一つ残らず取り除こうとしていたお母さんだったけど、今では一切手を出さない。あまり頻繁に飲ませるのをやめたら、この子は口を開け続けることに疲れてしまい、それっきり眠りこんでしまうから。この子が眠る姿は怖かった。安らかに眠ってほしいのに。充分生きたから楽になっていい、なんてみんな言っているのに。どきりとする。胸にせまる。呼吸がひどく遅くなっているとき。お腹の皮膚が波打っていないように見えるとき。この子が、苦しそうじゃないとき。

ぴちゃ、……ぴちゃ、……ぴ。

「もういいね。お腹いっぱいになったもんね」

お母さんが瞼を閉じはじめたこの子に話しかけている。この子は眠りながらおしっこをしている。立ち上がることもできないのだから、足にかからないようにするのは無理に決まっている。少し前までは犬用おむつを穿かせていたが、今は大腿の床ずれがひどくてとても使えない。股の間の干からびた毛が黄色く染まり、縮れて、また乾く。不衛生だし、ウエットシートで一日に何

度も拭いてあげているけれど、しばらくして見たら、やっぱりかさかさになってる。全身の毛並みがつやつやとしていたころ、この子がうちに貰われてきたころのことを思い出す。毎日庭を駆けめぐって、跳ね回って、ときには細いブロック塀の上をひよいひよい歩いて落っこちたりして、こんなに元気な生き物をいつか家の中へ入れるなど想像もしなかったな。どこへ行くんだ。どこへ行くんだらう。この子は、次は、だいたい、どこから来たんだっけ。仔犬を一匹貰ってくれ、と言って零歳のこの子をうちに譲り渡した、遠縁のおじいさんの家。たいへん山奥なんだとか。強靱な足腰と向こう見ずな性格は、そこで育まれたのかな。充分広いと思っていた我が家の庭も、山から越してきたばかりのこの子にとっては、狭苦しくてたまらなかったかもしれない。でも楽しそうだった。フリスビーキャッチの天才、植えたての青い芝生でまっ白な体を擦るのが大好きなやつ。今は庭よりもっと窮屈なサークルの内側で、灰色の毛布をかけられて眠りこむ。がりがりに痩せ細り、身動き一つせずに、自分の身を自分の重みでえぐっている。……「床ずれ」という言葉、なぜこんなに軽くて、問題なさそうな響きなの。

「寝ちゃった。このちゃん」

お母さんは笑顔のままひとしずくの涙をぬぐった。

「うん」

立ち上がりたい。早く離れたい。薄情だから。今更薄情でなくなってしまうような自分が嫌だから。こんな人間は消えてなくなればいい。この子が死にそうになって初めて、優しくすることを覚えたがるぼくなんて。

偽善者！

ぼくは老人のようによろよると立ち上がった。お母さんはまだ、この子の顔を一心にながめていた。

——ごめんね。ごめん。もっと大切に。してあげれば。よかった。ねえ。

しゃくりあげて、切れ切れに呟く言葉。誰の声。もちろん、お母さんだ。他に言える人がいないだもの。ぼくではあり得ないし、お父さんは思ったことを口に出すのが下手だ。思っても飲みこむべき、言うべきでないことをわざわざ伝えて、家庭のぎこちなさをさらに強めてしまうことはあっても。

この子が死んだんだ。

ぼくは横たわっている白い小さなもの。獣医さんらしき大人とお父さんの背中をよく見えないけれど、きつとあれが。

いたたまれないのか、お母さんはサークルに背を向け、ぼくの腕の中で泣いている。

口を動かしたかった。泣かないで、大丈夫だよ、この子は、天国へ行っただよ。何でも良かった、何か言わなければならなかった。乾いて張り付いた上と下の唇。指を入れてここをこじ開けて、さあ。手さえ動かない。体中が言うことを聞かない。お母さんは、マネキンに抱き留められ

ている。

きい。

おかしな声を上げ、白眼を剥いたお母さん。失神？ 後ろに倒れこむのを止めようとして、固まった細腕が悲鳴を上げる。親子で倒れこむ。サークルに頭をぶつけた。毛布を被った遺体が眼前にあった。死んでいたのはぼくだった。ぼくの顔をした、白い犬だった。

悪い夢だと思えなかったのはどうして。

冬の朝にもかかわらず、寝汗をびっしょりかいて飛び起きた、わけでもない。ぼくはいやに冷静で、黙々と布団を畳んでいる。急がないと学校に遅刻する。全身が動かせなかったのは、たぶん昨日夜遅くまで受験勉強していたせい、金縛りに遭ったからだ。疲労はたまっているけれど、成績はめきめき向上してきている。志望校にはまず落ちない。そんなことは大事で、大事じゃなくて。ぼくの顔がなぜこの子の体に付いていたのか。知りたくてたまらなかった。誰にも訊けなかった。

この子はリビングのサークルの中で、苦しげな呼吸を続けていた。

外に出ると、夜の間にかかしたこにできた水溜まりが、鉛色の空を映したり、空き地の土と混ざって底も見えないくらい黄色く濁ったりしていた。

急かし急かされる教室。公立高校入試まであと一月半。張りつめているようどこか、間の抜けた空気。まだ間に合うでしょう、とみんな思ってる。めいめい、お行儀よく座った椅子の上で、次々舟をこぐ。もうすぐ激流に吞まれると知ってか知らずか。国語の先生は厳しい人だけど、机

に突っ伏すなど、授業を明白に放棄するような態度を取らなければ、見逃してくれるはず。ウトウトしてメトロノームになるなんて、大人だってよくやることです。都合よく頭の中で言いわけしていたら、隣の席の男が、チョークを投げつけられた。大あくびしたところを見つかったらしい。眼に一杯涙を溜めて、白く染められた前髪を意味もなく手で擦り上げている。あんな野蛮なまねをする教師が今どきいるんだ。かわいそうに。かわいそう……。ふん、なんだ、あれくらいで。……あれくらい？ 何と比較しているんだぼくは。誰と？ 涙を溜めた眼。白、白色、白い犬、この子。この子と、ぼく。この子と、ぼくの、生まれかわり。横たわった人面犬。

ずっとかけ離れていると思っていた。ひとつになるイメージなんて浮かんたことがなかった。ふたりは家族なのに。家族はひとつであるという前提が、いったいおかしいのかもしれない。一度この子除いて考えてみよう。この子が来る前のうちのこと。お母さん、お父さん、ぼく、親子三人は繋がっている、らしい。意思で、絆で、血で、見えない糸で、……と言うのは簡単だ。つまり眼に映らず、手で触れもしない謎の力が、人と人とを強く結びつけていて、その状態を、ひとつの家族、と呼ぶのだそう。ものの本によると。

でも、「家族」三人の間には、毎日のように疎外感が生まれている。生まれては、消えてゆく。束の間の安心や喜びと、入れ代わり、立ち代わり。ときには貶めたり、我慢したり、演技をした。こんなのがほんとうの家族なんだろうか。

知覚できるものが確かだとは限らない。でも少なくとも、そうじゃないものが確かだと言える根拠を、ぼくは見つけられていない。

短い夜に見た不思議な夢。ひとつになる夢。

知覚できない不確かな力が、ぼくとこの子を近づけようとしている。

午後の最後の授業が終わっても、季節外れの長雨は止んでいなかった。かじかむ手を揉み、部活中止の報に沸く下級生たちを横目に見ながら、同じ方角に家がある友達を待たずに、校門をとぼとぼと出た。骨が一本折れていて、いびつな形で開くビニール傘が、今日の友達だった。話したいことがたくさんあって、話せることがないときの友達。透明なドームが雨粒を弾く、その武骨な音に耳を貸してやれば、ぼくは口を閉ざしたまま、大変な聞き上手になれる気がした。ほんとうはただ聞いているのではなくて、胸の奥でとりとめのない山ほどのことを喋り倒していて、水が跳ねるびちびちという音に、自分の声をかき消させているつもりなのだった。涙に言葉、どうしてもこぼしたいものはすべて、この中で。奥の奥に留めて、洩らさず完結させて。干乾びるまで。そう言いながらもいつまでも水びたしだから、この瞬間も胸は腐っていく。止まない雨はないが、二度と降らないこともない。降っている間どんな気持ちでいればいいのか、教えてくれる人は少ない。

「よう」

肩を思いきり叩かれる前から、何となくわかっていた。

「すまん。進路の話で先生に呼びだされてて……」

「遅いから先に出ちゃった」

「いい、いい。今、追いついた。入れてくれ」

連日の雨だというのに、彼は傘を持っていなかった。坊主頭がびしょ濡れで、頭皮が少し荒れ気味なのが見て取れた。頬にも赤い粒がいくつかできていて、潰した痕もある。幼子のように無邪気な笑顔にばかり眼がいつて、今まで気づかなかった。同じ傘に、この距離に入ることがなければ、ずっと気づかなかったかもしれない。

「あんまりじろじろ見るなよ」

「うん……」

元々一人守れるかも怪しいサイズの傘に、彼を入れると、たちまち体が横殴りの雨に打たれた。お互い様だし、どうでもよかった。肌荒れのことを訊くと、寝不足でさ、という答えが返ってきた。悩み事があったもはつきり言うやつじゃない。

「最近一組はどうだ？ やっぱりピリピリしてる？」

「うん……そうでもないよ。今日もみんなよく寝てた」

「チョークを投げつけられたりしてね——」

「そうか。そんなもんだよな。こっちも同じさ」

「そう——」

「ぎりぎりにならないと努力しない人間ばかり、集まってる気がするよ。他人のことは言えないが」

「ぎりぎりにならないと、ね——」

「まったくね」

「だいぶ疲れてるな。返事がきつそうだ」

「そんなこと……」

そうだろうか。ぼくは疲れているんだろうか。

「ゆっくり休めよ。たかが受験だぜ。高校なんかいくらでもある。どこかに引っかけて、またどこかで頑張ればいいんだから」

——そんなことじゃないよ。

もう落ちたみたいないぐさだ、と冗談めかして返すと、彼は手を叩いてげらげらと笑った。ぼくにはわかっている。たぶん、きみのほうが疲れている。公立高校を希望しているけど今の成績じゃ無理だ。塾にも毎日通ってるね。家に帰ったらすぐ行くんでしよう。進路の話で呼ばれて、職員室にまで連れて行かれて、ずいぶん長い間話しこんでいたじゃない。ほんの少しずつでも、焦ってきているのが、やつれてきているのが、わかるよ。愚痴は言わないし、いつも通りものすごく明るく接してくれるけれど。

さっきのせりふが、きみ自身に向けられたものであるように、ぼくには感じられたんだ。

「何か悩んでることがあるなら、話してくれよ。いつでもいい。じゃあな！」

「じゃあね」

別れてから後悔した。どうして聞き上手になれなかったのか。自分の悩みを打ち明けないのなら、せめて人の話を聞いて、理解してやればいいのに。独り善がりもいとこらだ。数少ない、得がたい、素直な言葉を交わせるはずの友達を、ぼくの方から遠ざけてしまった。

掌にはふたたび一人を守るようになった傘が残っている。歩み寄ろうともしなかった短い会話のおかげで、ちょっと気が楽になった自分が、ひどく醜く思えた。悩んでいるのはぼくだけじゃない、みんなが同じように苦しんでいればそれでいい。そんな浅ましい考えが胸に潜んでいたことを、どうにも否定できなかった。

玄関の鍵は今日も開いていた。

「ただいま」

サークルまであと二メートル。真後ろに立ってようやく、気づかれた。

「あら、お帰り！ 雨強かった？」

「まあまあ」

「制服も髪も濡れてるじゃない。早く着替えてね」

「うん……」

今日は言わなくてもいい。

お母さんはウエットシートでこの子の体を拭いてあげていた。そういえば、大雨なのに庭を駆け回って、泥だらけになった日でも、こうしてわざわざ体を綺麗にしてやることは滅多になかった。もう昔のことだ。この子の体がとても丈夫だったころの話。

「エイジが傘持ってなくてさ、男同士相合傘で帰ってきた」

「へえ、しっかりしてそうなのに珍しいわね」

「いや、そうでもないんだよ、あいつ。色々抜けてて……」

話すことに理由はない。話していれば忘れられる。この子の前で、この子の話をする、ひどく胸が苦しい。台所へ行き、お母さんに渡された銀の皿にたっぷりの水を汲み、戻ってきてからも、ぼくは今日学校で起こったこと、入試問題に一定の傾向を見つけたことなど、たわいない話をし続けた。

「十二歳ね」

「えっ？」

「ユウトが三歳のときに貰ったもの。このちゃん」

お母さんはお世話をしながら話しているのだから、そのうちこの子の話になるのはわかりきっていた。だのにぼくはうろたえた。

「お母さん、犬を飼うのは初めてじゃなかった。だいぶ小さいころだけど、子供のころに飼ってたから……。車にはねられて死んだわ。あっという間」

微笑みが崩れる前に話してしまおうというような、やけに性急な口調だった。

鳴きもせず眠りもしない。この子は、お母さんの手に瘦せた顎を乗せて、濁った眼を見開いている。噛みつきそうなく、狂いだしそうな光は、今は宿っていない。

「元気だった家族が亡くなることの辛さは、子供ながらに感じていたつもり。だから、このちゃんは、今まで大きな病気も怪我もなかったし、老衰で逝けるのなら幸せだと、ずっと思ってた。でもまさか、体がこんなにぼろぼろになるのが、『老衰』だなんて……」

筋力が弱り、後ろ足が立たなくなった中型犬は、満足に歩くことができなくなり、やがて寝た

きりになった。骨と皮ばかりになった太腿は床ずれを繰り返し、数十分おきの体位変換もむなし、皮膚が擦れ、裂け、なけなしの肉がえぐれていった。眼が見えなくなり、鼻がきかなくなり、耳が遠くなり、体を摒や、植木鉢や、庭のあちこちにぶつけて、打ち身や擦り傷が絶えなかった。家の中に入れてからは、「老衰」による多臓器不全がはじまり、免疫力が衰え、ちょっとした怪我也も治ることはない。血や体液が一度染みだした場所は、二度と乾くことはない。硬いものから軟らかいものへ、液体へ……餌を変えても、何をいくら食べても、体は痩せ細ってゆく。

二階へ上がって着替えるはずだった頃は、床に膝をつき、湿った掌全体で、大人しいこの子の頭を撫でていた。水気のせいで、色あせた毛がいつも増してまとわりついてくるのを知っても、離さずに触れ続けた。潔癖症は治らないかもしれない。あとで何万回手を洗ってもいい、今はただ優しくしたい。

「小三のときだったかしらね。ユウトが初めて、独りでこのちゃんの散歩に挑戦したのは……。お父さんもお母さんも用事があって、夜遅くまで留守にした日。覚えてる？」

「うん、なんとなく」

「泣きながら電話してきたのよ」
えっ。

「そうだったっけ」

「うそ、覚えてないの？ リードを離してこのちゃんが逃げちゃったって、わあわあ言ってるさ！」
古い記憶のスクリーン。厚い霧を裂いて横切る、大きな犬の影。この子じゃない。どこかの誰

かが放し飼いにしていた、青い首輪の雄犬だ。年ごろの雌を見つけ、興奮して躍りかかってきた。怯まずに抵抗したこの子。ぐちゃぐちゃに絡みあう体、頼りない細い紐。ああ、そんなに強く引く張ったら、腕が……。

「思い出した」

夜の住宅街を家族みんなで探した。お父さんも、明日の仕事のことなど一言も口にせず、散歩道、公園、蔦に覆われた廃屋の庭まで、くまなく見て回った。ヘンテコな名前をとときき呼びながら。

「秋が終りかけていたころだったわね。家から二キロも離れた道路の、落ち葉が詰まった側溝に落ちて、ぶるぶる震えてた」

冷え切った、腐りかけの植物の死骸で満ちた隘路、ミミズやダンゴムシの根城に挟まって、ジタバタともがく。どんな気持ちになるだろうか。

「だいたい、散歩は危ないからしなくていいって、ユウトには言ってたはずよ。ほんとに心配したんだから！ あのとときはさすがに風邪を引いたと思ったけど、くしゃみを何回かしたくらいで、このちゃんはずぐ元気になったのよね」

少し前から引っかかっていることがあった。お母さんが強調したこと。「今まで大きな病気も怪我もなかったし」……。そうだったっけ。

ぼくは若くて、子供で、それなのに約六年前の逃亡事件は、もはや「古い記憶」となり、はっきりと覚えていない。他人から聞いた話を、自分が経験したように思いこんでいることもあるだ

ろうし、その逆があってもおかしくない。おぼろげにしか蘇らないのが悔しい。この場で思い出すべき何かが、他にもあるはずだった。

そして、小学三年生のぼくは、わずかな迷いもなくこの子に触れていたに違いない。やめると言われた散歩に出るくらい、この子と一緒にいたがった。

いったい、いつから避けはじめた。くだらない潔癖の病に罹った。

「だめね、昔の話をして……。シャワー浴びて着替えてきなさい。風邪ひいちゃうわ」

仕方なく手を離すと、この子はびくりと背中を震わせた。触れたときはなんともなかったのに、怯えるように、悲しむように。双眸の海は重く澱んでも、生命の潤いを保っている。ぼくはいつも見えていられる。名残惜しい思いはこの胸の中か、この子の瞳の中か。同じ気持ちがあるかもしれない、どんなに幸せなことだろう。そんなことは誰にもできないと、よくわかっているけれど。

「お母さん、ぼく、今日」

「なに」

「今日、この子の隣で寝る」

夜になって、サークルの横に布団を敷こうとしているぼくを、お父さんが奇異の眼で見ってきた。

「何してる」

「寝る準備」

深く訊かれるかと思つたが、お父さんはああ、と理解を諦めた顔で頷き、お気に入りのソファへ向かつてのそのそと歩いていった。いつもこうだ。子供のやることには口出ししない。

どういうわけだか自分でもわからない。この子の顔を見ながら眠れば、この子が若返り、元気になる、そんなはずはないし、ぼくの心がいくらか癒されるとも思えない。試しに敷布団に寝転んでみると、立っているときや膝をついているときとは比較にならないくらい強いにおいが、瞬時に鼻腔を密閉した。文字通り固形物で栓をされてしまったように、他のおいが何一つ感じ取れなくなった。膿と血と便と、それから。成分がどうであれこれは一種類の臭気。生きたこの子のおい。このにおいを嗅がなくなる日も来るらしい。明日か明後日か、ずっと先の話であつてくれるかは、神のみぞ知るところ。その日が来るまでぼくはここにおいて、思いついたことはあれもこれもとやり続ける気がする。どんな行為がこの子のためになるのか、それは知らない。ただ、この子のことを見守っているうちに発想したことは、すべてやり遂げるつもりだった。理屈をこね回している時間はない。

「庭でいつもひとりぼっちだったからな」

誰に向かって喋っているのか、一瞬わからなかった。

お父さんの言葉を聞き、ぼくは身を固くした。

「小屋に入ればいいのにそうせずに、家の方を向いて寝ていたことがあった。知ってるか」

「……うん」

ソファからは見えないと知っていつつ、首を横に振る。

「さぞ明るかったんだろう。窓の内側の話し声も、犬の耳にははっきり聞こえていたんだろうな」話し声。お父さんは談笑について言いたかったのかもしれない。ぼくはそれより遙かに多く、日常茶飯事だった、夕飯時のやみくもな口論を思い浮かべた。ぼくの言葉遣いのこと、交友関係のこと、テストの点数、心底どうでもいいようなことで、あわやつかみ合いの大喧嘩。お父さんもぼくも後先考えずに、身勝手な主張を繰り広げたんだ。お母さんが黙ってそれを見ていた。取り繕った笑みを浮かべ、頬を震わせて。

そんなときは二度目の散歩に出た。

庭からみんなを呼ぶ声が出たから。

長い尻尾を振りながら、ガラス窓の向こうで、「もう一度ー」と。

この子を静かにさせる、という名目と、リードとビニール袋をもって、ぼくらは外へ出る。街を歩けば不思議と心が落ち着いてきて、口を開けばこの子のことばかり。そんなに引っ張らないでよ、夕飯前にも行ったのにすぐ元気だね、家族みんなで散歩しているからこの子も楽しいのかね……。仲直りは常に幸せ。

この子の体調が悪化すると、二人の口論も、二度目の散歩もなくなった。

そうだ、みんなきみのことを気にかけていた。きみの前ではどんな厄介事も霞んだ。きみに注意を引かれたら、ぼくもお父さんも、いがみ合ってなどいられなかった。

「……きることがあったら」

「えっ？」

「何か、お父さんにもできることがあったら、言って」

小さな声が辛うじて耳に届いた。気恥ずかしいこと、お父さんが勝手に気恥ずかしいと思いでいることを話すときは、決まって急激にポリウムが下がる。これだって、家族だからわかる癖。喧嘩をしたり、理解し合えなかったりして、疎外感を覚えることがあっても、ぼくらはみな家族だ。否定はできない。

一晩中ここにいようと思った。苦しい夜、この子がぼくを見て、ぼくのことを考えていてくれたら、わずかでも安らぎを得られると信じて。この子の安らぎもぼくの安らぎも、一緒に訪れると信じて。

夜鳴きで起こされたことは数知れない。二階にいたって眠れないことが多かったくらいだから、覚悟の上だった。ひゅん、ひゅん……。だんだん声がかすれていく。鳴かないで、みんなついてるよ、どこにも行かないよ。眼で訴えかけてもこの子にはもう見えない。耳元で叫んでも、聞こえているかどうかわからない。手で触れても、これほど熱にうかされていては、誰に触れられたのか、知りようがない。まどろみの中、悲鳴はおさまることなく、痛切に響く。夢の中にまでそれは持ち越されて。

「まって」

無数のひびが入ったガラスの空の下を駆けていく。
青い芝生がどこまでも続く世界を、駆けていく。

「待って」

上に行かなくちゃならない。あの空の上に行かなくちゃならない。飛び上がらなくちゃ。ひどく高い。ひどく、遠い。

「待って！」

叫ぶ。叫ぶ。誰に呼びかける。ガラスの空の向こうにいるひとたち。気づいて。ここにいない。置いていかないで。このままここに。

空を翔ける羽がないから、ひたすら走り続けるしかなかった。その足もやがて棒のようになり、ぶるぶる震えて、ばたりと倒れた。横たわったまっ白な体、こんなに不自由な体、あらゆる痛みを知って耐えた、痩せこけた体……。わたしのからだ。

薄目を開ければ、空は粉々に割れて、奥が見通せる。透明な破片が降り注ぎ、草原のそここ所で、わたしの白い毛と毛のすき間で、甘い朝露のように輝く。

うつくしい。

ああ、空が迫ってくる。わたしに近づいてくれる。わたしから近づく力が、今はないものだから……。でも意志はあるのだ。いつまでも一緒にいたい、家族みんなと。

そう、あなたとも。

芝生に降り立った人に向かって、わたしは夢中で尻尾を振り、地面に打ちつけた。冷たい足を

懸命に動かし、その場でもがいてみせた。

「待って、た……」

遮るものはない、まっすぐここへ飛んできて、頭を撫でて。

わたしの声をかき消そうと、彼の耳を食らう羽音。

「気をつけて！」

駆けつけた人は、何かに怯えたように立ち止まった。その瞬間、黒い虫の大群が、彼の頭を覆い隠した。

ユウト、ユウト！

ぼくは顔を上げた。水っぽい視界にスジが走っていた。臉にはりついた犬の毛だと気づくまでに、少し時間がかかった。

この子の首に顔をうずめていたのだ。

「サークルが動く音がして来てみたら、ユウト、どうしたの？」

お母さんはやけに取り乱している。時計を見てみると、午前三時だった。最後に起きていたのが何時だったか、思い出せない。とにかく、まどろみの中、ぼくは布団から出て、サークルの戸を外し、この子の頭を抱き、まっ平らな毛並みの首に、

「ユウト……」

涙を落としていた。

「この子に呼ばれたんだ。ぼく」

記憶が蘇った。お母さんが言っていた通り、この子は今まで、大きな病気も怪我もしたことがない。でも一度だけ、予防接種や定期健診以外で、この子を病院に連れて行ったことがある。

蒸し暑い日、七月ごろだったろうか。この子が庭を囲むブロック塀の上で足を滑らせ、ちょうど花盛りだったサツキの木に背中から落ちて、いくつも引っかけ傷を作ったのは。枝の山に全身埋まり、薄紅色の花びらを額に乗せてジタバタする様がかわいくて、面白くて、庭で一緒に遊んでいたぼくは、心配するより先に笑ってしまった。その程度のことでの子が弱るとは思わなかったし、実際それから数日は、なんともなかった。

小学三年生。たぶん、夏休みが始まってすぐ。朝のラジオ体操から帰ってきたぼくは、何気なくこの子を見て、おかしなことに気づく。

首に蠅が止まっている。

何秒かそこにいるだけなら、別段疑問には思わなかったはずだ。しかしその蠅は、芝生に寝転がって体を擦ったり、すばしこく庭を走り回ったりするこの子から決して離れようとせず、ときおりふわふわ宙を飛んだかと思えば、また同じ位置へ戻るのだった。付けっぱなしの、首輪の上に。

「この子？」

そういえば、よく見るとこの子は、何かに怒っているようだった。煩わしいことでもあるよう

な……。ぼくが呼ぶ声に応えず、扉に身をもたせかけて、うなりながら首を、背中を擦りつけはじめた。

「どうしたの」

不安になって、落ち着かせたくて、ぼくは繰り返し、この子の頭と首をさすった。

——ジュク。

不意に覚えた、得体の知れない感触。

妙に湿っていて、粘り気があって、反射的に手を離すと、伸びてきた黄色い糸から、生肉の腐ったようなにおいが漂った。

指先に付いた白い紐状のものが、まぶしそうにうねうねともだえ、芝生に落下した。

サツキの枝で作った傷が膿み、そこに蠅が卵を産みつけていたことを、病院の先生に教えてもらった。長い毛と首輪で傷口が見えづらかったので、誰にも気づかれることなく悪化していたらしい。幸い生まれた蛆は少なく、目視で確認した分はすべて取り除けたそうだ。過度に湿潤になっていた傷口は、消毒された上でガーゼを貼られ、ほどなくして完治した。入院もせずにすんだ。

でもその日以来、ぼくは怖くなった。この子と遊んでいるとき、耳ではいつも、あの不気味な羽音を聞いていた。黒い蠅と、黄色い糸を引く膿と、白い蛆のことで、頭がいっぱいだった。

触れなくなったわけじゃない。ぼくの胸には、この子を避けたくない気持ちがある。確かにあった。

この子が嫌いになったわけじゃなかったんだ。ただ一回限りの、生理的に受けつけられない感触を、恐れただけで。

むしろ、もっとこの子のことを好きになりたくて、ぼくはお母さんの言いつけを破り、独りで散歩に連れていったのだ。秋が終りかけていたあの日の夜。

お父さんの手で側溝から引き上げられたこの子は、濡れそぼって震えていた。雑木林の腐葉土にタバコのヤニを混ぜたような、耐えがたい悪臭を放っていた。きたない、と思った自分を叱るために、ぼくは眼を閉じてこの子を抱き寄せ……。

夏と同じ感触に出会った。

「大丈夫だよ。もう大丈夫」

「そう……？」

お母さんの眼にも涙が浮かんでいる。

「ごめんね。ここ何週間も、お母さんこの子のこと気にしてばかりで、ユウトの心配全然してなかったわ。受験生なのね……。重なって辛いのはお母さんじゃないのに、ほんとに、ごめん」
「ううん」

ぼくの辛さは、ぼくが作ったものなのだ。この子のことを避けてきた辛さも、今ようやく過去と向き合えた嬉しさも、やるせなさも、ぼくの胸に抱く思いは生涯、ぼく自身によって作られていくもの。誰のせいで決まることでもない。ぼくが辛いのは、お母さんのせいじゃない。

だいいち、お母さんは少しも休まず頑張ってくれていた。家族全員の幸せのために。

「みんなこの子が心配だったんだ。お母さんがこの子のお世話をしなかったら、ぼくもお父さん

もどうしていいか、きつとわからなかったよ。この子にかまうことが、この子のそばにいること
が、お母さんの道だったんだ。三人みんなの」

だからもう悲しまないで。

指を通じて流れこむイメージ。この子と庭で遊ぶとき、たとえ真夏でもはめていた分厚い手袋。
爪を立てて撫でることすらためらう日も珍しくなかった。温もりなど長い間忘れていた。この子
もぼくの掌を忘れていただろうか？ お母さんはぼくの潔癖症に気がついていたらかもしれない。
汚れた手袋を毎日洗濯してくれていたのは、お母さんだった。中学生になり、独りで散歩をする
のも当たり前になると、ぼくはこの子の排泄物の処理をしなければならなくなった。手袋越しで
もビニール袋越しでも、自分勝手な生理的嫌悪にどうしても勝てなくて、ときどき糞を道路へ置
き去りにした。家の近くでこの子がおよおしはじめたら、無理矢理引っ張って帰り、ポールに繋
いでしまった。「庭に糞がある」、夕方、ゴルフの素振りをして庭へ出たお父さんが、ぶつくさ言
いながらビニール袋を取りに戻ってくると、ぼくは「散歩のときにしなかったからしょうがない
じゃない」と吐き捨てた……。

言いわけはしてもし足りないもので、望まれていないもので、今はただ感じ入りたい自分がい
る。白い毛、ミックス、雌、中型犬、元気で、無鉄砲で、声が高い、フリスビーが好きで、シャ
ンプーが嫌い、こんなに温かくて、柔らかい。この子を言い表す言葉は尽きない。すべてのきみ
を覚え続ける。忘れたって何度でも出会う。そばにいてくれてありがとう、ガラスの向こうから
呼んでくれてありがとう、ぼくらを繋ぎとめてくれてありがとう。

もう長く鳴いていなかった。驚くほど静かだった。かすかに揺ると、この子は浮き出た眼をきゅっと細めて、ぼくの腕のなかで微笑んだ。熱で震える体を休め、ほっとしたように、確かに笑った。

白い帽子をかぶっている。ぼくらの立っている頂より、ずっと高くて遠い頂。でも麓に下りてから見てみれば、ここら一带の山はみな、霧とも雲ともつかないふわふわの、白い帽子をかぶっている。つんとした若草のにおい。命が芽吹き、あざらかに色づきはじめる季節。空は抜けるような青。日射しを受けて、風を感じて震えだす、一面の緑の絨毯。木陰で恋しげに鳴く鳥。すべてはざわめいている。生き急ぐことに、憧れるように。

「お母さん……」

ぼくは穴を掘っていた。深い穴を掘っていた。お父さんと二人で。小さな骨壺を今、お母さんから受け取った。

「少しでもいいのよ、うちの庭にも埋めてやるんだから」

「うん」

こんなにちっぽけでもろい欠片が、大きくて強い、生きていた証。春の土の中へ還る。お父さんがスコップを二本とも持っていてくれた。掌に力を入れないようにしながら、ぼくは深い穴の

底に、この子の骨を落ちつけた。

この山の上に住んでいた遠縁のおじいさんは、ぼくが生まれる何年も前に奥さんを亡くし、それ以来ずっと独り暮らしだったそうだ。多いときは七匹もいたという飼いだたちの面倒を見るのが何よりの楽しみだったが、高齢のため車の運転を控えるようになり、麓の街へ下りる手段がなくなつたため、親族に勧められて都会へ移り住んだ。最後に残っていた二匹の犬は、地域も事情も異なる家にそれぞれ引き取られた。この子の甥と姪だ。

おじいさんがいなくなったので、家屋は取り壊され、山の上には不自然に開けた土地がある。自然の中の不自然というのも、ちょっとおかしな話。

この子をふるさとに連れて行ってやりたい。提案したのはお父さんだった。火葬がすんで、家の中に骨壺を安置してからおよそ二カ月が経ち、そろそろ庭に埋めてやろうか、という話をみんなですべてしていたときのこと。ぼくはエイジと同じ高校に合格し、受験勉強からようやく解放されていた。

「貫いに行ったとき、ここで名づけたの」

懐かしげな口調でお母さんが言う。

「この子は特別に毛が白くて、この子は雌だけど雄より元気がよくて、でもこの子はきつと、誰にでもよくなつくだろうよ……って、まだ名無しだからそうとしか呼べなかつたんでしょうけど、話を聴いているうちに、『この子』、それが名前のような気がしてきちゃつたの。いい加減でしょ、でもほんとよ。ねえ、お父さん」

「……ああ」

お父さんは自分のことのように照れくさそうだった。

「いい名前だと思うよ」

ぼくの言葉を聞いて、二人は眼を見合わせて、もっと照れくさそうにした。

「埋めて、やろう」

解した土をかけていくと、もうぼくの胸にあるのは悲しみとか後悔とか、もちろん嫌悪とかいったものとは全く別のもので、涙の雨も泉も、時の流れに揉まれて消えて、そこは風に吹かれ、すっきりと乾いていることがわかった。この子の膿んだ傷口の感触、それを恐れたときに芽生えた、胸が腐る、という感覚。水びたしで叫んでいた鋭利な心。忘れたわけじゃない。だから、ぼくは幾つになっても、この子がいたことを思い出せるのだ。

じゃあね、この子。

見上げれば、ぼくにはまだ辿り着けない世界、ぼくを見守ってくれる世界へと続く、透き通ったガラスの空があった。

(文学部総合人間学科三年)

痛み

森 水希

「あっ、バスきたよ」

真由の明るい声にうしろを振り返ると、彼女の言う通りバスが停留所に入ってきたところだった。深夜近い時間帯を走るバスはがらんとしていて、客は誰もいない。

「今日はわりと時間通りに来たな」と呟くと、黒澤は当然のように一番に乗り込んだ。それに続いて私たちもバスの階段を上る。居酒屋のバイト帰りの私たち四人は、シフトが重なるということもこうして同じバスに乗って帰る。居酒屋や定食屋が立ち並ぶ夜の街はいつまでも明るく、騒がしい。

バスに乗るといつものように真由と達也先輩は後ろの方の二人掛けシートに隣同士で座った。窓際の席に座った達也先輩が真由に笑いかける。彼が笑うと、目の下にひっかいたようなえくぼができた。

私はというといつものようにカップルのふたつ後ろの二人がけシートに私は座り、自然とふたりと私の間を埋めるような形で黒澤が私の前の席に腰掛ける。黒澤は前の席のふたりにも私にも

興味がないうように席に座るなり携帯をいじりはじめた。もう深夜だというのにまだ寝癖のついた髪の毛にはいくつもフケがくっついていて、暗い窓ガラスには彼の携帯が反射していて、そこには画面いっぱいリズムゲームのステージが映し出されていた。これがバイト帰りのお決まりの座席ポジション。黒澤の痩せているのに無駄に広い背中のおかげで、窓際の席にちょこんと座る真由の姿はほとんど見えなくなる。私は毎回、そのことにほっとしながらも、ふたりの一挙一動に目を光らせていたいという衝動を抑えきれずにもどかしさを感じてついつい首を伸ばしたりする。愛が可視化できるなら、バスの車内中にピンクの煙と大量のハートが充満しているにちがいない。自分でも愚かだと思うけど、傷つくことがわかっていながら私は達也先輩から目が離せない。

真由は私と同時にバイトを始めた同期だが、可愛らしい容姿と気が利く性格のおかげで瞬く間にバイトのアイドル的存在になった。真由には甘いマカロンだとか軽くてふわふわした綿飴がよく似合う、と以前厨房でバイトの先輩たちが喋っていたことを思い出す。動物で例えるならウサギ。あるいは猫、仔猫ちゃん。小さな体で一生懸命動いたり話したりするさまは男の庇護本能をかきたてる。

だけどあざとくしてたかなその心根はマカロンとは程遠い境地にあることを女の私は知っている。ウサギ？仔猫ちゃん？冗談はよせ。彼女のラインのアイコンはたしかにミニウサギや生まれた仔犬の写真が大半だが、もちろんそれも男うけを狙ってやっていることで、間違ってもあの写真は彼女自身ではない。言葉遣いや甘え方や気の遣い方それらすべてが計算された演出で

あり、私にはない巧みな技をうまく使いこなして男を釣っているのだ。

達也先輩も例外なく、釣られてしまった。彼女は私知らない間に先輩と距離を縮め、あれよあれよという間にお互いの家に行く間柄になり、おや、と思った頃にはもう時すでに遅し、ふたりは付き合っていた。あつという間に私の恋は死んだ。違う、死んだというのは語弊がある。恋が死んだのならもう痛みも何も感じないはずだ。私は真由のSNSでふたりのツーショットを見かけるたび、バイト終わりにふたりが同じ家に帰っていくのを見送るたび、胃の奥が震えるような痛みを感じる。あるいは、ふたりが付き合っていると知った今でも、達也先輩からラインがくると思わずスクリーンショットをしてフォルダに保存してしまう。相変わらず返事を送る文にはいちいち悩み、同棲している真由が携帯を見る可能性も考えてやたらな文やスタンプは送れないため余計悩み、時間を費やし、ふと自分はなぜこんなことで神経をすり減らしているんだろうと虚しくなり、結局また胃が震える悲しみを感じる。だから恋を死なせることなんてできない。死んだのは恋の脈だけだ。

「ねえ明日お弁当いるよね？」

真由の小さな囁きが鼓膜を大げさに揺さぶる。お弁当。なんてエロティックな響きだろう。早朝からのお弁当作り。お弁当という言葉がこんなにセクシャルなものだったとは。愛する彼氏のために早起きしてお料理ですか、泣かせますなあ、と心の中で冗談っぽく言おうとしたら棒読みになった。彼らの愛は、たとえバスの車内という公共の場であっても他者を寄せ付けない雰囲気醸し出し、ふたりだけのプライベートゾーンを作り出す。幸福の匂いというのは部外者をいた

たまれない気持ちにさせるからすごい。

「いるけど……明日は俺が作るっか。たしか二限からだろ、真由も」

耳障りなブレイキ音をたてて、バスがゆるやかに停車した。ふたりの後ろ姿からフロントガラスに視線をずらして見ると赤信号だ。環境に気を使っていないこのバスは、停車したあとにブロロ、と馬が鼻を鳴らしたような音をたててエンジンを切った。驚くほどの静寂。エンジン音が消えたあとのバスの中は、知らない人とふたりきりで乗るエレベーターの密室特有の息苦しさと同じ。呼吸するのもはばまれるような張り詰めた静けさ。その静寂の中で、私は達也先輩の後頭部を見つめた。パーマもカラーもしていない一本一本が太くてしっかりした黒髪。その髪をベタつかないマットタイプのワックスで毎日きちんとセットしていることを私は観察しているから知っている。マットワックスは粘土みたいな匂いがしがちなのに彼の髪からはかすかに爽やかなシトラスの香りがするから、身なりには無頓着なタイプかと思いきや髪には割といいものを使っていることも知っている。なぜ私がそんなメンズの整髪剤事情までマニアックなことを知っているかというと、ネットで調べたからである。彼が使っているメーカーを知りたくて『ワックス、メンズ、べたつかない、マット、シトラス』で検索をかけたら、さすがに彼の使用しているワックスの特定までは至らなかったけど、マットワックスは匂いが独特で苦手な人も多いという情報を口コミから入手した。きちんとまとめられた黒髪からは清潔感が溢れていて、その分、唇が割とカサついていることに気づいたときには膝カックンを食らったような気分になったが、そのささやかな彼のギャップさえも、いい。もはやなんでもいい。彼を彼たらしめる存在ならば、

私はなにひとつ否定しない。

気づくと、私だけではなく彼の隣の真由も、達也先輩の髪の毛を見ていた。ほっそりとした指が彼の髪に伸びる。

「そういえばさ、たつのワックス切れそうじゃなかった？」

真由の明るい声がバスの静寂を破ってよく響いた。両耳にイヤホンをした黒澤がスマホの画面を指で規則的にタップしている音がかすかに聞こえる。

「あーそういやもうすぐなくなるな。いつもみたいなのに、真由が適当なの買ってきてくれない？」ズン、と鈍い衝撃が腹の辺りに広がる。身構えていないときにみぞおちパンチをまともに食らったこの衝撃。まさかネットであんなに嗅ぎ回った達也先輩のワックスを実は真由が選んで買ったこととは。へえ匂いにはこだわるタイプなんだぁなんて妄想して喜んでいた自分が馬鹿らしい。というか彼女という存在が達也先輩の肉体の一部にまで侵入し、染色していることが悔しい。せめて、使い終わったあとのワックスの空ケースを私にください。真由が選んで買ったことは忘れて、机の上に飾って、毎朝崇めます。あわよくばケースにこびりついたワックスの残り香を嗅ぎたい。なんて言ったら先輩は私としゃべるところか二度と目も合わせてくれなくなりそう。

高校生の頃、友達に「水希って片思いしてるってよりかは、アイドルに対するファンみたいだよね」と言われたことがある。同じクラスの山田くんという男子に惚れていると話したとき、そう言われた。工具用ハサミで無造作に切った感じの彼の前髪がたまらないから、私は彼の指に握られて彼の髪を散髪する工具用ハサミになりたいのだと熱く語ったら、「水希はアイドルが汗を

ふいたタオルを死に物狂いで欲しがるファンに似てるよね」と笑われた。

ファンで何が悪い。まるで「おまえのそのすきという感情表現は恋ではない」と否定されたように当時の私は傷ついたけど、恋愛感情なんて千差万別、性癖だって多種多様じゃないか。正解なんてない。あのときの私は好きな人の工具用ハサミになりたかったし、今なら達也先輩のジャケットのチャックになって毎日開け閉めされたい。気になる男と飲みに行ったり、映画を観に行ったりすることだけが恋じゃないんだ。インターネットを駆使して好きな人の情報を嗅ぎまわり、携帯の中にコレクションとして保存するという内向的でインドアな恋があってもいいじゃないか。なんて、威勢のいいことを言えるのは自分に言い聞かせるためであって、実は内心焦っている。SNSでカップルの「今日で三ヶ月！これからもよろしくね」みたいな記念日ツイートを見るたび、あるいはデート先で撮ったツーショットを見るたび、「こんな投稿誰が見て得するわけよ」と鼻で笑いながらさっさとスクロールして画面から消すが、何も彼らがおませだから浮かれているわけではなくて、これがこの年の男女としてあるべき姿なのではないかと気づき、ふと神妙な気持ちになってもう一度写真を眺める。私の携帯のカメラフォルダに男とのツーショットなんて一枚もない。そもそも男の写真自体、芸能人と二次元アニメキャラクター以外のものは数えるほどしかなく、それはバイト仲間とご飯に行ったときに撮った集合写真から達也先輩だけを拡大して切り取ったストーリーカー一步手前の写真だけである。

私が恋に積極的になれないのは、自分に自信がないのと、なんとも思わない相手からの好意を嗅ぎ取ったときの、あの興ざめしたやるせなさ、意地悪な優越感を身をもって知っているから。

だからもし相手に自分の意地汚い感情がばれてしまったら弱みを握られたような気がして、恥ずかしくてまともに顔も見られなくなる。片思いは好きという気持ちが相手にばれてからが勝負、と聞いたことがあるけれど、私の中では気持ちが悪くばれてしまった時点でもう試合終了。え？何もせずに相手が振り向いてくれるのを待つだけのくせに些細なことで傷ついたり怒ったりするなんて傲慢じゃない？その通りだと思う。だけど私にはそうすることしかできない。深刻なシャイと妙なプライドが邪魔して慎重すぎる行動ばかり選択しては、何もかもうまくいかず同じ場所で地団駄を踏む。

信号が青に変わり、バスが重々しいエンジン音をたてながら動き始めた。暗い窓ガラスに目を見やると、そこに映った私と目が合った。表情のない私はどこか間抜けに見える。もともと口角が少しだけ上がっているせいで、口をつぐんでいても微笑んでいるように見える私の顔。そのせいで初対面の人からは勝手に優しそうだな、穏やかな人みたいに美化された印象を持たれやすく、ふと私が誰かの悪口を言ったり毒を吐いたりすると、女の子たちは目を丸くして怯えたように「意外だね」なんて言う。意外ってなんだい、そもそも君が勝手に私の人間像を作り上げていただけじゃないか。よく知りもしない人の性格を見た目の印象だけで決め付けるなんて相手に失礼だとは思わないのかい。なんて、もちろん口には出さず、いや出せず、私はにこにこしながら「ごめん、なんか愚痴りすぎちゃった」なんて謝る必要などないのに謝罪し、人から充てがわれた穏やかな水希ちゃんのポジションに無理やり体をねじ込む。幾つになっても私は中学生じみた友達こっから抜け出せない。大学生になった暁には、異性同性関係なく本当に自分の好きな人

とだけ付き合おうと心に決めていたのに、そんな決断と強さなど持ち合わせていなかった私は結局、よくわからない奴らと一緒に授業を受け、学食でお昼を済ませ、よくわからないまま家に帰る。おそらく、相手も私のことをよくわからない奴だと思っっているにちがいない。教室で見つけるとなんとなく隣の席に座って授業を受けるが、街中でたまたま遠くから見かけたらきつと気づかないふりをするだろうな、という微妙な関係。友達といえは友達だけど、名前、出身地、所属しているサークルなど、誰しもが自己紹介で言い終えてしまいうような必要最低限の情報しか知らない。何が好きで、何が嫌いなのか、将来の目標、今夢中になっていること、どんな人が好きでどんな生き方をしたいのか……大事なことはなにひとつ知らない。だけどお互いその漠然としたもやもやには気づかないふりをして、何も言わず平然と一日一日をやり過ごしている。よくわからないまま日々を消費して、よくわからないまま大学一年生の冬が始まろうとしている。

ふたたびバスが信号に引っかけたって停車する。横断歩道の信号が青に変わるが、渡る人は誰もいない。窓から見える住宅の明かりはほとんど消えていて、人々はみんな明日に備えて大人しく過ごしている。そういえば今日は何曜日だった、そうだ水曜日だ。一週間の真ん中の一番気怠い時期。ここ最近、肌寒くなってから朝起きるのがひとときわしんどくなってきた。体を包み込むところとした柔らかい眠りを乱暴に引っ剥がすあの目覚ましの音。自分の体温で生温かくなった布団から這いずり出た途端、身体中を冷えた空気に刺されるあの泣きたいような絶望感。明日は朝一限から必修科目の授業がある。達也先輩と真由がゆったりと朝のひとときを過ごしていると、私は教授が殴り書きした板書を無感情でノートに写し取っていくだけの面白くもなんともな

い作業をしなければならぬと思うと憂鬱だ。

「ねえ、今日どっか行く？」

リップを塗り直していた真由が鏡をポーチにしまいながら、弾んだ声を出した。バスの蛍光灯に照らされてつやつやと唇が光る。

「昨日もカラオケ行ったじゃん」

真由は夜に遊ぶのが好きだ。朝から授業が詰まっている私は、学校とバイトを終えて疲れているため帰って眠りたいのだが、達也先輩という大きな存在の誘惑にいつも負けてしまう。彼の声を間近で聞き、彼の笑顔を間近で拝み、彼と同じ空間で同じ空気を吸うためだけに、私は余裕のないお財布からカラオケ代やボーリング代を払ってしまう。正直なところ、一人暮らしをしている身でもあるため遊びの出費はかなり痛い。家賃と学費は親からの仕送りだが、水道代や電気代、携帯電話の月々の支払い、食費はもちろんその他の雑多な出費はバイト代で賄っているため、自由に使えるお金なんてほとんどない。奨学金は、県外の大学を受けると親に承諾してもらったときの交換条件で、生活はすべて仕送りとバイトの稼ぎでなんとかすると約束していたため受け取っていない。一人暮らしがこんなに大変だとは思わなかった。生活にお金がかかるし家のことをする時間はないし、親のありがたみが嫌でも身に沁みる。

「俺さあ、金欠なんだよねー」

だから達也先輩が頭を掻きながら照れ臭そうにそう言った瞬間、救われたと思った。

「あーたしかに、そだねえ、今日はやめとくか」

真由がすんなり引き下がった。場の空気を壊すことなく話の流れを変えられる達也先輩はすごいと思う。まあ彼のあの笑顔で何か言われたら、私ならなにひとつ断れないけど。

キンコン、と音がして停留所名が切り替わり、『次は、松岡山入口、松岡山入口でございます』という女性のアナウンスが入った。すると達也先輩が思いついたように突然「松岡山に登ろうよ！」と目をキラキラさせて言った。「はあ？」と真由が素っ頓狂な声を出す。

達也先輩は私を見ていた。たまたまタイムイングが重なっただけではあるけど、まるで、私だけに向かって悪戯な提案をしたように、目を輝かせてこちらを見ていた。彼女である真由ではなく、私のことを見ていたのである。その途端、私の中で小さな何かがぼんと音をたてて弾けて、弾けたものはあっという間に身体中に行き渡り、指先まで染めた。考えるより先に手が伸びて降車ボタンを押していた。ピンポンと派手な音を鳴らして車内のあちこちに設置されたボタンが一斉に赤く点灯する。水希ちゃんどうしたの、と驚く真由の声にはかすかにヒステリックさが滲んでいて、達也先輩と私が突如謎の連携を見せたことが信じられないのだろうと思うと気味がよかった。バスがゆるやかに停車する。「どうしたの、ノリいいね」と驚き、というか少し怯えながらも達也先輩が座席から立ち上がった。もしかしたら冗談のつもりで言ったのかもかもしれない。そのときようやくスマホから顔を上げた黒澤が怪訝そうに立ち上がった私たちを見ていたが、あえて構わず私は颯爽とバスの通路へと進んだ。自分の突拍子のない行動にまともな判断が追いつかない。今このバスを降りてしまったら次は何時に乘れるかわからない。無茶なことをしているのは承知だが、急に軽くなった身体は驚くほどの行動力を見せて軽々とバスを飛び降りた。感情が追いつ

かない。頭の中は混乱していたけれど、混乱の中には漠然とした期待があった。先が見えない選択に、強く惹かれた。

バスを降りると、凍えるような空気の冷たさに身体が震えた。寒さに鼻がつんと痛み、目がしばしりする。マフラーをしていない首や手袋をはめていない指など、外気にさらされている部分の皮膚が寒さに痺れる。松岡山入口と書かれたバス停のうしろに、ゆるやかな坂の車道が見えた。しかしよく見ると車道の脇に鬱蒼と草が生い茂る徒歩コースの階段が設けられている。白い街灯の光が届く距離は限られていて、まっすぐと上に向かって伸びるコンクリートの階段は闇に続いていた。

うしろから声がして振り返ると、真由と達也先輩がバスから降りてきたところだった。私を見ると真由は尖った声で「何考えてるの」と言った。

「いきなりどうしたの、水希ちゃん、山登る気？」

達也先輩を見ると、困ったように私と真由を交互に伺っていた。いつも甘い声で話す真由が、達也先輩の前で余裕がなく切羽詰まっている調子で話すのを見るのはなんだか愉快だ。

「ごめん、冗談だと思わなくて」

私が出ると真由は黙りこみ、沈黙を破るように達也先輩が「まーまー、どうせ降りちゃったんだから登ってみようよ。言い出したの俺だし」と明るい声を出すと、ナチュラルな動作で真由の肩に手を置いた。

先輩、と心の中で問いかける。あなたの彼女はちょっとレールから外れた行動をしただけでこ

んなに怒るのですか、つまらない女だと思いませんか。先が見えないどうなるかわからないこそ惹かれて選びたくなる、そんな未来だってアリだと思えますよね。達也先輩、きっと今のあなたには想像できないでしょうけど、そう考えたら私との未来だってアリだと思いませんか。

「おまえら、なんなんだよ」

黒澤が地面に唾を吐きながらバスを降りてきた。いかにもひっぱられてきて迷惑そうな黒澤に、別に行こうなんて誘った覚えはないんだけど、と言いたいのを堪える。

それにしても後先のことを一切考えずにそのときの衝動に近い感情だけで行動するのはなんて気持ちがいいんだろう。今まで自分がどれだけ多くのものに縛られて生きてきたかがよくわかる。守るべきものがない人が一番おっかないと聞いたことがあるけれど、今ならその意味もわかる気がする。解き放たれた人間はきつとがらんどろの瞳で力なく笑い、突拍子もない行動を平気で起こしたりするにちがいない。いつもより大胆な行動をしたのは認めるけど、すべてから解き放たれるなんて私には到底無理だ。どんなに苦しくても狂うことができないのと似ている。

イライラと時計を気にする真由に「持つよ」と荷物を渡すよう促す達也先輩にくるりと背を向けると、私は山を登り始めた。十段登ったあたりで振り返ると、観念したようにふたりが階段を登り始め、黒澤もわざとらしく舌打ちをしながらこちらに向かって歩き出していた。

歩行者用の階段は思ったよりも一段一段が急で、街灯もなければ手すりもないため、かなりのスリルだった。鬱蒼と茂った木々のせいで月明かりすら入ってこず、暗闇の中の階段を感覚だけを頼りに登っていく。ついさっきまでぶつくさ非難していた真由も、山を登り始めたとたん静か

になった。うしろから一人分の足音がどんどん近づいてきたかと思うと、「おっせえよ」と言いながら私を追い越したのは黒澤だった。彼の足取りは思いの外軽かった。

黒澤はすべて大して冷たい。だけど頻繁に、「ドライな俺って格好いいだろ、と言わんばかりのナルシストな行動を挟んでくるから鼻につく。たとえばバイト終わりにみんなでカラオケに行くと、黒澤はあえて誰も知らないようなマニアックな洋楽しか歌わない。そして歌い終わると「ほら、どうせ俺と君たちは趣味が合わないんだよ」とでも言いたげに気怠くため息をついてみせる。口癖は「どうでもいいんじゃない？」と「俺はそう思わない」で、事あるごとにあくまで自分は人と違うことを主張したかった。自動販売機で買うのは決まってBOS Sのブラックコーヒーのくせに、鞆の中にチョコレートを常備するほど甘いものが好きだということはバイト先の人なら誰でも知っている話だった。

五段あたり先に見える黒澤の背中を追いかけるような形で、私は階段を登り続けた。あたりはしんとしていて、私たちが山に侵入する足音と呼吸だけが聞こえる。頂上までは一体どれぐらいかかるのだろう。車では五分で済む道のりは、歩くとどれぐらいだっけ、しかもハードな登り階段ときた。

延々と続く急な階段に息が上がってきた。さっきまであんなに凍えていたのに、額にはうっすら汗まで滲んでいる。転ばないよう、怖いからあえて真っ暗な足元を見ず、だんだん速度をあげて遠くなっていく黒澤のお尻から目を離さなかった。暗闇の中にぼんやりと浮かぶ淡いベージュのジーパンのお尻は私の道標。少しでも油断すると闇に紛れて見失ってしまいそうだから、絶対

によそ見はできない。そのときうしろから白い光が伸びてきて、誰かが携帯のライトで足元を照らしてくれた。幾分か明るくなった階段を登り続けながら、それが真由ではなく達也先輩であることを願った。

「けっこうきついな」

しばらくしてからそう言った達也先輩の声は少し嬉しそうだった。彼が同じ空間で私と同じ行動を楽しんでいるということが幸せだった。「そうですね」と私が返事をする、達也先輩が息だけで笑ったような気がした。

どれぐらい登っただろう。私たちは黙々と一定のペースで階段を登り続けた。踝までの靴下が歩きたび靴の中でずり下がってくる。かかとに靴下が寄り固まったぐしゃっとした感触が不快だったが、立ち止まって靴を履き直している間にみんなに置いていかれるのが怖かったから我慢して歩いた。息をするたび肺がきしきしと痛む。硬い石段を登り続けているうちに、膝と足首も痛くなってきた。痺れるほどの寒さの中で鼻と指先は冷たいまま、体の芯が燃え上がり汗が噴き出す。

そのときふっと風の向きが変わった。おや、と思っていると前方を歩く黒澤が階段を登り終えたのが見えた。頂上だ。思ったよりあっけなかった。

「うはあぁ」

うしろから真由のため息まじりの歓声が聞こえた。駆け足で私を追い越して最後の階段を一段飛ばしで登り終える真由を、コンタクトが乾燥してぼやける視界でとらえた。「めっちゃ疲れた」

と笑ってみせる真由に「さっきまであんな文句言ってたのに」と達也先輩が笑った。あんなキレイな文句垂れていたくせに、信じられない。最後の最後に無邪気にはしゃいで周りを安心させる真由のぬかりなさというかあざとさというか。達也先輩と喧嘩したとしてもこの笑顔でちゃんになるんだろ、なんて思ってしまう。

階段を登り終えるとしばらく整備されていない獣道が続き、茂みを抜けると突如広々とした場所が現れた。そこがいつも車を停める駐車場であることに気づくまで、少し時間がかかった。私たちは駐車場を横切り、見晴らしの良い展望所に向かった。煙草の匂いが風に運ばれてくる。空中にぽかんとひとつだけ浮かんだ光が見え、どんどん近づくと、街灯としてのシルエットが影となって浮かび上がり、見渡すと展望スポットの広場に到着していた。真ん中にぽつんと立った街灯があたりを照らしており、何人かの人間が広場の隅っこの光が届かないベンチのまわりでたむろしている。黒澤のあとに続いて広場を突き進むと柵の向こう側に見えてきたチラチラと光る無数の街の明かりに鳥肌が立ち、久々に見る夜景に自分が感動していることに気づいた。乾いたコンタクトのせいでぼやけて輪郭を失った光は幻想的で、思わずため息が漏れた。そのときはははっ、と少し掠れた笑い声が出て、見ると達也先輩だった。絶景すぎて参ったなあ、と思わず漏れたような笑い声だった。そんな彼のナチュラルな感情表現がとても好ましくて、なんともないふりをして静かに夜景を眺めながらも、すごい好き！と心の中で叫ぶ。真由なんかより間違いない私の方が彼のことを心から余すところなく好きであると確信しているけど、大事なのは片方の一方的な愛の大きさより、両者の愛であることを私は知っている。

黒澤が近くの誰も座っていないベンチに腰をおろした。なんとなく私たちも彼にならって腰をおろす。私たちはひとつのベンチに座ったまま、黙って夜景を眺めた。私の隣の真由の隣から達也先輩の息遣いがかすかに聞こえてくる。階段を登り終えたばかりのせいかいつもより息が荒い。彼女という特権を盾に、そんな彼の隣に平気な顔をして座れる真由が羨ましい。その特権を手に入れるためなら私は何だってするのに。そしてもし手に入れたら誰よりも彼に尽くす。ほかのどの女より早起きしてお弁当だって作るし、誕生日だって盛大に祝うし、誰よりも達也先輩が彼氏であることを誇りに思える自信があるのに。

凍えるような冷たい風に晒された身体はさっきまでの汗が嘘のように芯まで冷えてゆく。

「ちょっと、トイレ行ってくるね」

真由の声がして横を見ると、彼女はすでに立ち上がり、達也先輩に手を差し伸べていた。暗闇に浮かぶ小さな手。達也先輩はその手を恥ずかしげもなくするりと掴むと、立ち上がった。氷の棒を刺されたようにこめかみがキンと痺れる。先輩を見上げて笑う真由の顔をまともに見れないまま、私は自分の膝に視線を落とした。ふたりが手をつなぐ瞬間がスローモーションで脳内を反芻する。

ああ、そうですね、と私は妙に冷静に思った。せっかくなら綺麗な夜景はふたりだけで拝みたいですよ、わかります。私はできるだけ心を空っぽにしようと、寿限無寿限無五劫の擦り切れ……と古典的な早口言葉を心の中で必死に唱えた。ただ脳裏に焼きついたふたりの手の映像が頭から離れない。きつとあとで更新される真由のインスタグラムやツイッターの写真は達也先

輩とのツーショットで、私はもちろん、黒澤の存在も当然のように切り取られて無かったことにされるのだろう。『思いつきで真夜中から松岡山に登っちゃった〜夜景も綺麗だったしいい汗かいたし、やっぱり人生ノリが大事（笑）』みたいな浮ついた文章を嬉々として打ち込む真由の姿が目につかぶ。充実している自分を過剰に表現して幸せを演出するなんて虚しすぎるよね、なんて言い聞かせつつも、そんな薄っぺらい投稿で百を超えるいいねスタンプを稼げる真由のことを羨ましいと感じている自分もいる。他人の幸せ溢れる眩しい写真にいいねスタンプを押す神経がわからない。心からいいねよかったねなんて絶対に思っていないくせに。だったらなんだ、他人の幸せを受容できる心の広い自分でも演じて酔いしれているんだろうか。意味がなさすぎる。

「明日一限からなのになあ」

ふたりきりになったベンチで、突然黒澤が独り言を言った。いや、これは聞く相手を意識している聞こえよがしの嫌味。

「いや、ごめんごめん。思い切ったことしたよね」

だから黒澤のことは別に誘ってないから、と心の中でぼやく。勝手に付いてきて文句を言うなんて勘弁してほしい。すると黒澤は「まあ別いいけど……」とため息をついた。

「黒澤って何かサークル入ってたっけ？」

話題を明るくするために聞くと、黒澤は「とくに何も入ってない。俺に合うサークルが見つからなかった」と気怠そうに答えた。左様ですか、あくまで主体は「俺」。仮にこいつがサークルに入ったとしても協調性が欠片もない上に自分に絶対的な自信を持っているからどうせ長続きは

しなかっただろう。きっと辞めるときも「俺には合わなかった」とサークルのせいにするに違いない。

「森は映画なんかだろ」

映画なんかか。ちゃんと研究会をつけてください。なんとなくバカにされているような気がするが、私は黙って領いておいた。

「池本はサークル入ってるっけ？」

「真由はたしかバレエのサークルに入ってるよ。ちなみに達也先輩はジャズ研究会の部長」

「あー、達也先輩のことは知ってる。あのサークル、けっこうガチャらしいな」

ジャズ研究会はサークルじゃなくて部活です、とツッコミたいのを堪える。音楽系と聞くとどうせ大学生が趣味に楽器を嗜む程度で酒を飲むのが目的なんだろ、と思われがちですが、達也先輩の部活は週五日活動、入部時には楽器の試験もあり、県内ではあちこちで色んな賞もとってる真剣な部活動なんです。

「たしか音楽系の仕事を目指してるらしいよな」

何気なく呟いた黒澤の言葉に、全身の細胞がぎょっと反応する。え、なにそれ、初耳だ。

「そ、そうなの？けど先輩、教育学部で教員目指してるんじゃない……」

「ああ、それは音楽の道がダメだったときのために資格だけ取るって」

そうか、そうなのか。達也先輩、ああ見えて夢とか追いかけちゃうタイプなんだ。生活の安定よりも人生の充実度の方が大事ですよ。今日が何曜日なのかわからなくなるような同じことの

繰り返しの機械的な毎日よりも、もっと刺激溢れる生活を。人生なんてスリルがあった方がちょうどいい。

「そんな話、黒澤いつ先輩としたの？」

さりげなく聞いたつもりだったけど、気づくと身を乗り出していた。

「えっと、たしかバイト終わり飲みに行ったとき」

このふたりがそんな深い話をする仲だったなんて。信じられない。男同士、女には言えない夢を語り合っていてやつか。少し照れくさそうに自分のことや音楽の夢のことを語りだす達也先輩を想像したら、黒澤が羨ましくなった。達也先輩のはにかんだ笑顔だけでご飯三杯はいける。

「それで達也先輩は、そういう、夢を追いかけることに対して今の彼女は否定的じゃないから助かる、みたいなことも言ってたな」

さらっと黒澤が言った台詞がダイレクトに浮ついた心に突き刺さる。瞬間、身体中の温度が一気に冷え、興ざめた。とっくに夢の話聞いていた真由の愛に落胆し、さらに達也先輩の元カノの影までもをすっかり感じ取ってしまい、さっきまで高ぶっていた気持ちが一瞬冷え切る。不意に、胃の奥から何か黒く絡まったものがこみあげてきて、吐き出すようにとっさに言葉が口を衝いて出た。

「けど実際のところ、夢なんか追いかけても周りに迷惑だよな」

衝動的に口から吐きだされた憎しみのこもった黒い言葉に自分でも驚いた。大好きな達也先輩の夢ならばたとえどんな夢であろうと大好きなはずなのに、どうしてだろう、私はその夢をめっちゃ

めちゃんに破壊してしまいたい。

「そんなこと言うなよ」と黒澤が笑う。「森も応援してやれ」

私は自分のいない彼の未来を愛することができない。達也先輩が自分を見ていないと気づいたとき、私はわざと必要以上に大きな笑い声を出して自分に注目を向けさせようする。子供っぽい行為だと我ながら思うけどやめられない。それでも彼が私を見ないときには、背後から忍び寄り突如頬をピンタして不意打ちを喰らわせてみたくなる。驚いて頬に手を当てながら振り返る彼にむかって猟奇的な満面の笑みを浮かべて「やっとこっち見てくれたね」と言って彼を怯えさせてみたいという暴力的な欲望。彼の感情を一瞬でもいいから独占したい。それが恐怖であれ、怒りであれ、かまわない。いつもどこか余裕のある表情を浮かべている彼の、むきだしの感情に触れてみたい。

「どうせいつか死ぬなら、生きてるうちに夢ぐらい追いかけてもいいと俺は思うけどな。好きなことを好きなだけ」

呟くように黒澤が言った。足元から吹き上げる風に黒澤の前髪が揺れる。たしかにそのとおりだと思う。死、という言葉には現実味がないものの底なしの恐怖を感じる。何色か、と問われれば黒だ。光のない、漆黒の闇。死が無だとすれば、今ここにいる私はなんだろう。死という爆弾を抱えた光。束の間きらめく儂い花火。死という絶壁に向かってひた走る私たち。もし明日自分が死んだら、私はきつと後悔する。それぐらいの覚悟でしか私は毎日を生きていないということだ。本当にやりたいことがあるなら、夢だって好きなだけ追いかけていいと思う。どうせいつか

死ぬのだからという投げやりな利那主義も悪くない。

だけど、好きなことを好きなだけというのは違う気がする。好きな食べ物を好きなだけ食べていい、というのと同じじゃないか。自分の願望と欲望だけに従って生きるなんて醜い。好きなことしかやらないなんて、そりゃ個人の人生は豊かになるかもしれないけど、いつまでたっても何も守れない。この世界でよりよく生きていこうとするならば、自分のことだけを考えていてもダメだ。人と共存し、ときには妥協し、譲ることも必要。その上で嫌なことでもしなくちゃいけないことはするべきだ。なんのために生きるのか？ 幸せを見つけたら、夢を掴むためだとか、いろいろあるけれど今の私が考える生きる意味はたったひとつ、子孫を残すこと。産めよ増えよ地に満ちよ。地球上の生命体は同じ種の仲間を増やすために神から体を授かった。そのためには自分の好きなことだけをやってはだめだ。だから街中でインタビューされて「稼いだお金を自分以外の誰かにつぎ込むなんて考えられない」と平気で言うような自己投資欲が強すぎる女にだけはなりたくない。野生動物を見てみる。彼らはなんのためにあれほど必死に毎日を生きて抜いているか、いうまでもなく子孫を残すためだ。そのためだけに、オス同士はメスを取り合って死に物狂いの喧嘩をし、親は卵なり子供なりを命がけで守って育てる。彼らの生涯はすべて生殖のために存在しているといっても過言ではない。

とはいっても家族や他人、特に中年のおっさんあたりから「女の子なんだから結婚して子供産むことが使命なんだよ」みたいなことを言われたら私は憤慨するだろう。種の存続のためにはメスが子供を産むことが必要なのは十分わかっているくせに、女であることだけを理由に勝手に私

の人生の義務を決めつけられたらたまったもんじゃない。とはいえ、女の子だから料理なさい、皿洗いしなさい、行儀良くしなさい、なんて言われたらきまって怒るくせに私は、それらすべてを守っている真由みたいな女の子がうまく世間を渡っていけるということも知っていて、時々羨んだり嫉妬したりするのだ。勝手に矛盾した生き物であると自分でも思う。

「黒澤は夢とかあるの？」

さっきから夢について語っていた黒澤に聞いてみた。すると彼はあっさり「ないよ」と答えた。

「え、ないの、夢は素晴らしいってさっき言ってたくせに、ないの？」

「俺は夢云々の話じゃなくてもっと高い次元の話をしたんだ」

なんだそれ。何かを語ることに意義を見出す自己陶醉タイプ。絶対彼氏にはしたくない。へえ、と私が相槌を打つと話題が途切れて沈黙が訪れた。ベンチから見渡す夜景は相変わらず煌々としていて、夜の街は何時になっても本当に明るいなと感じた。遠くから若者の話し声がする。

「なあ、森」

沈黙を破ったのは黒澤だった。喉に痰が絡んだような声で名前を呼ばれ、なぜか私が咳払いをしよう。

「お前ってもしかしてだけど、達也先輩のこと好きなんじゃねえの」

圧倒的な不意打ち。なんという単刀直入な聞き方。話題の振り方が雑すぎて、驚きのあまり声も出なかった。いきなり人の好きな人を聞きだすなんて、しかも凶星、デリカシーが微塵もない

男だ。私が何も言えないで黙りこんだのを見ると黒澤は「……やっぱり」と勝ち誇ったように呟いた。

「あからさまに態度違うって思ってたんだよなあ」

やっとの思いで「誰と？」と声を発すると「その他大勢に対する態度と」と黒澤が答えた。

気づかれていた。しかも黒澤に。何も見ていないような気怠げな目をしていくせに、あれは演技だったのか、仮面だったのか、こいつ鋭い。

「え、本人にもバレてるかな」

不安になって聞くと「いや、気付いてないだろ。だって全然おまえに興味なさそうだし」と黒澤はさらりと私を深く傷つけた。何も言わず、無言のまま私は夜景に目を戻す。気のせいか、さっきよりも街の光が減っているように見えた。

「けどあいつ付き合ってるよな」

ふたたび不意打ちを食らった。私はバツと音がするぐらい勢いよく首を回して黒澤の方を見る。ピキッとかすかな痛みが走り、それもまた黒澤のせいだと思ふと余計腹が立った。どうしてここでまた真由の話を持ち出してくるんだ。それぐらい知ってるよ馬鹿野郎と怒鳴りたいのを我慢して、黒澤を無言で睨みつける。すると黒澤は私の睨みが冗談だと思ったのか、あるいははもともと頭がおかしいのか、いきなり噴き出すとひとしきり笑ったあと掠れた声でこう言った。

「可哀想」

風が激しく吹いて髪の毛を巻き上げ、乱す。爪が食い込むほど強く拳を握りしめて、気づくと

右手に生々しい肉体の感触があつて、顔を上げると両目を見開いた黒澤がみぞおちを押さえて体をくの字に曲げていた。

「なにすんだよっ」

げほげほと咳き込みながら黒澤が怒鳴った。怒りで視界がちらつく。どうして私はこれほど黒澤から侮辱されなければならないんだ、わけがわからない。大して親しくもないくせにこれが冗談のつもりだとしたらナンセンスだ。拳の感触がなかなか消えないあたり、かなり強く殴ったことは否めないが、悪いのはそっちだ。

「可哀想とはなんだ」

私が凄むと黒澤は「おまえ手のはえーよ」とまだ咳き込みながら言った。

「たしかに、今のは俺の言い方が悪かった。けど可哀想ってのはほんとだよ。別に森を見下して言ったわけじゃなくて、ただの情だよ、憐れみだよ」

情。憐れみ。小難しい漢字が頭のなかにぼかんと浮かぶ。たしかに優しさは憐れみから、と聞いたことがある。かの偉大なイエス・キリストも、人類を憐れんで救った。不憫に思うことは思いやりを生み、美德と賞賛される。主よ、憐れみたまえ、と人間は神に助けを求める。だけどそれは神が偉大だからであつて、神に憐れみを求める者だって自分より目下の者から「可哀想に、あなたを不憫に思うよ」なんて言われたら憤慨するだろう。私が今、黒澤に激怒したのはきつと私が心の中で黒澤を見下していたから。不器用でナルシストでモテない黒澤をどこかで可哀想な人だと認識していたから、そんな彼から情をかけられてプライドが傷ついたのだ。

「黒澤には言われたくないよ」

素直に思ったことを言ったら、黒澤はなぜか目を丸くして私を見た。可哀想と思われていることにちっとも気づいていないところがまた不憫。だけど私は黒澤ぐらいの凶太さと自信がほしい。自分が可哀想であることに気づいてしまったら、とたんに自信を失って猫背になり、目だけを鋭くぎよろつかせながら通りを歩くことになる。

「ごめん、おまたせ」

黄色い声が出て、見ると、見なくてもわかったけど、真由だった。達也先輩と手は繋いでいないものの、体をびったり寄せ合ってこちらに向かって歩いてくる。黒澤が立ち上がり何事もなかったかのように歩き出した。

黒澤がわからない。いつもは携帯ゲーム以外に興味を示さなくせに、突然私を可哀想呼ばわりした黒澤がわからない。そう考えたら、世の中わからない人ばかりだ。心の中でなにを考えているかなんて、表情と行動から察するのが精一杯で所詮憶測に過ぎず、結局のところわからない。真由だって、達也先輩だって、どんなに親しい人だって、血を分け合った家族だって、わからないことばかりだ。人は人と交わり、衝突し、影響し合う。だけど誰かを完全に理解しあうことなんて不可能だ。自分のことだって、時々わからなくなるのだから。今も、どうして達也先輩ではなく黒澤の後ろ姿から目が離せないのかわからない。生まれてから死ぬまで人は孤独だ。その孤独から目を逸らしてお互いを癒すために人と関わり、愛を築く。だけど家族以外の場所で絶対的な愛を見出せない私みたいな人間は、SNSの海に溺れて気を紛らわす。ネットを通して誰かと

繋がっているという感覚を定期的に身体に沁み込ませないと、立ち上がることもできないような虚無感に襲われてときどき発狂しそうになる。人間とは所詮脆い生き物なのだ。それとも私が極端に脆弱なだけなのか。

「ほら水希ちゃん、なにしてんの、行くよお」

真由の声がする。達也先輩の表情は暗闇に溶け込んでいて見えない。だけど、いつもみたいに余裕のある微笑みを浮かべて立っているような気がする。

黒澤の痩せた背中に向かって誰にも聞き取れないくらい小さな声で「可哀想だね」と呟いたら、なぜかじゅわっと視界がぼやけて街の明かりが揺れた。

(文学部総合人間学科二年)

愛別離苦の計略

水田 修

そこは、とある病院の一室だった。

加藤早苗はここ数日目が覚めない夫の看病をしていた。彼の口には酸素マスクがつけられ、数本の管が体に繋がっている。この病気のせいで自分たちはどれだけの幸せを奪われたのだろう。余命半年と判断されたのはもう数ヶ月も前のことだった。治る見込みはない、と医者にはっきりと言われた。その言葉を思い出すと、こうやって看病することが無意味に思えて、虚無感を覚えてしまう。

しかし彼女はそんな状況で一つの光明を見出していた。その医者とは別の男にこう言われたのだ。

——貴方の夫の病気は治る。

彼女は信じていた。信じてすが縋るしかなかった。

「被害者は榊甲丞さかきこうすけ。三十五歳男性。職業は……ええっとなんとしようか。これは、いわ

ゆる……健康食品の製造、販売といえますか」と田仲千紘ちひろはやや緊張した面持ちで言った。

「煮え切らないな」と彼の先輩である倉敷昌まさるはそのゴツゴツとした指に白い手袋をはめながら応じる。

「ええ、まあ。はっきりとしない職業ですよ。とはいえこの状況のほうこそ、はっきりとしないんですけどね」

県警の刑事である田仲と倉敷は命令に従い県北にある殺害現場を訪れていた。そこは民家の書齋で、床には血の跡と倒れた男の輪郭を形どるようなテープが敷かれている。鑑識の作業が進む中、彼らは現場を観察する。

「まだ加藤早苗とは連絡がつかないのか」

倉敷のその大きな眼は常に相手の元へと向けられ、睨むようにして離さない。それは彼の癖だった。相手の目を見て話すという基礎的な振る舞いを彼の如き眼力でやられると睨まれているようで、怒られているような感覚に陥り田仲は目を逸らしたくなる。

「え、ええ、携帯電話や実家の方にも連絡を入れているのですが、それが、まだ……」

「そうか。だが通報は加藤早苗が行った、ということなんだな？」

「ええ、それは確認を取りました。通報の際自分の名前と住所と電話番号をはっきりと書いてますし、通話記録に残っている音声の一部を近所の人に聞いてもらって間違いないと。それでも確実とは言えませんが」

倉敷は腕を組んだ。

通報があったのは八月二十五日の午後六時半。家の中で人が死んでいる、との通報だった。十分もしない内に救急車と警察が駆けつけ、辺りは騒然となった。その事件の中心となっているのがここ加藤家である。

加藤家は三十六歳の加藤誠と同じく三十六歳の加藤早苗の二人暮らし。二人の間に子供はなく、他に同居人もいなかった。ただ夫の加藤誠は近頃病を患ったらしく、家に帰ることはほとんどないらしい。田仲はその病院にも電話をかけたが、電話を受け取った看護師から到底話せる病状ではない、と一蹴されてしまった。

「現在近隣住民に対し事件当時の様子について聞き込みと付近の捜索を行い加藤早苗を探しています。この状況じゃ加藤早苗が犯人である可能性が一番高いでしょうね……」

「どうだろうな」

「え？」と、田仲が聞き返したとき、既に倉敷は振り返り、現場の捜索を始めようとしていた。

時間は事件発生の二日前に遡る——八月二十三日の午後三時、加藤早苗は榊甲丞のオフィスを訪れていた。看板から内装、榊甲丞の服装に至るまで何かの医療施設またはそれに準ずる研究施設のような体をなしている、その場所は加藤早苗の自宅から百キロメートル以上離れた場所にあるオフィスの一室だった。

さらにその中のパーティションで区切られたあたかも診察室のような場所で加藤早苗は榊甲丞と対面していた。

「あの……本当に主人の病気は治るのでしょうか……」加藤早苗は疑うような口調で言った。予め数回メールのやり取りをして、目の前の白衣の男、榊甲丞との情報交換は済んでいる。もちろんメールでも同じことを聞いた。夫の病名を伝え、さらに進行度を伝えた後であってもそれでも治ると、彼は返信してきたのだ。

榊はしばらく無言を貫いた。それはまるで加藤早苗を観察しているような時間だった。

「絶対とは言えませんね」やがて目線を加藤早苗が持ってきた診断データに再び戻し、彼は応えた。「わざわざ遠くからお越しいただいて、その上でこんな弱気なことを言うようで申し訳ないが、確実に治る、と言える状況ではないようだ。加藤さん。貴方の旦那さんの病気は私がメールで聞いたものから想像していたよりもかなり進行してる」

「……そうですか。やっぱり……」

「ただ、希望がないわけではない」

「え？」

「これは似たような患者の例なんですが……」彼はテーブルの上のパソコンを操作しながら、早苗に画面を見るように促す。そこにはいくつかのCG画像が映し出されていた。「この黒いところが腫瘍なんだが、この人も同じ様に体中に広がっている、分かりますか？」

「え……ええ。わかります。近頃、何度も見えますから」

「そうか……。これがこの人のええと……二年前の状態だ。で、その後この人は、『S.T.M.』を試すことで運良くというべきか、退院している」

「えっ。退院なさったんですか？」

「ええ。今年も年賀状をもらいましたよ。残暑見舞いだって届く。家が近所だから実際に話を聞きに行ってもいい。うちは公的な医療機関じゃないが、その分この辺のプライバシーも緩くてね。もちろん向こうに許可をとってからの話だけど」

「二年前……」早苗は繰り返さずにはいられなかった。余命半年と診断された夫と同じ状況にいた人が今、二年たってもこの世で生きているという事実を無視することはできない。ただ、彼女の疑心は同時に、最後の言葉は私に対する予防措置なのかもしれないということも考えさせる。

「連絡をとりましょうか？ 連絡先まで教えることはできないがどこかのレストランで話ぐらいはできるかもしれない」

「そうですね……」彼女はその前患者と会って話をしたかった。話をすれば色々なことが確かめられる気がしたからだ。

一つは当然、榊甲丞の言うこと、そしてその治療法が本物であるか、ということだった。早苗が『S.T.M.』について知ったのは今から一ヶ月程前。初めは、とあるネットの掲示板でその手法の名前だけを見つけたのだ。似たような医学的な根拠のない方法はいくつも存在していたが『S.T.M.』はそれらの方法とは違い、医療現場で正式に採用されていないものの、医学誌に論文を寄稿し、治療データも公開しており、実際に治った人もいる、それらの根拠が早苗に希望を与えた。その後何度か医師免許を持つ榊甲丞と名乗るこの男と連絡を取り合い、現在に至るのだ。彼女はしかし今でもまだ信じ切ることはできない。榊甲丞は詐欺師かもしれない。でも、もし

かしたら彼の言う以前の患者、その家族と話をすればその疑念を払拭できるかもしれない。一人の詐欺師ならともかく、詐欺師の集団ならその中に綻びを感じるはずだ。

その上で、早苗が『S.T.M.』が本物であると確信した上でのことだが二番目に確認したいことがあった。いや、それは確認というよりも、相談と言ったほうが近い。同じ病気を患った人の苦しみ、そして何よりも『S.T.M.』が本物だとしたらそれが一体どういうものなのか患者目線での言葉がほしい。効果が出るのにどれだけの時間がかかるのか、治療中苦痛を伴うのか、伴うのならどれほどの苦痛なのか、そしてなによりも、彼らがこの治療を行うと決断した理由が知りたい。なぜなら――

「悩むのも無理はない。よく吟味して、結論を出して欲しい。なにせ大金だ……『S.T.M.』を行うためには機材や入院費諸々込みで三千万円近いお金がかかるんだからね」

「はい……」

三千万円――それが彼女の迷いの原因だった。もちろん家族の生命とお金であれば、迷わず生命を採る。しかしこのお金は決してドブに捨てて良いお金ではない。確証のない治療法にそんな大金を払うのはどうしても躊躇ためらってしまう。今は、まだ――

結局その日は榊甲丞と名乗る男から『S.T.M.』について詳しく聞き、結論を出さなまま、加藤早苗は帰宅の途についた。帰る前に一度夫の病室を訪ねる。

「私は……」返事のない夫に呼びかけた。「私には、決められない。決められないよ……」

榊甲丞殺害から一日後の警察署内。廊下に置かれたベンチに腰掛け、田仲千紘は缶コーヒー片手にほっと一息つく。気が重く、うつむきがちになっていた。

「おう。田仲じゃん。どうした、そんな落ち込んで」と近くを通りかかった同僚が話しかけてくる。

「いや、落ち込んだって言うわけじゃないけど、今度の事件さ。倉敷さんと同じになっちゃって。あまり眠ってないんだよ。今日」

「あーなるほどな。それはご愁傷様」彼は田仲の隣に座る。「あの人は仕事の鬼だからなあ」

田仲は苦笑する。倉敷の噂はどうやら同じ課の田仲だけではなく、署内に広がっているようだった。

倉敷昌は刑事になるべくしてなったと噂されることがある。

その睨むような眼差しは取り調べの際、被疑者から真実を引き出す魔力がある。幼い頃から柔道を習い、高校大学ともに好成績を収めたそうだ。機動隊員でも一対一では彼と勝負できるものは少ない。

その上で、真に驚嘆すべきは犯人逮捕にかける情熱と行動力だ。交代勤務ではない通常勤務のとき、彼よりも後に退署する人はおらず、先に出署する人もいなかった。そのことから倉敷昌は二人いるのではないかと囁かれた程である。

曰く、「倉敷昌と組んだら睡眠は許されない」

曰く、「倉敷昌の眼力の前には誰も嘘をつくことができない」

曰く、「前日に肺に銃弾を喰らった日でも仕事をしていた」

曰く、「前日に嫁が亡くなった日でも仕事をしていた」

様々な噂が飛び交いどの噂も本当で、どの噂も嘘であるかもはや判別することができない。ただ、少なくとも田仲千紘は一つ目の噂が限りなく真実であることを昨日身をもって知った。

「はは。正直言っても忌引ぐらいは許してもらいてえよな」他人事のように笑いながら、同僚は言う。

「そうなんだよ。一緒にいるときもずっと俺のことを睨んでくるし……正直怖えよ。俺は犯人でも被疑者でもないのに。何考えているのか全く分からないしさあ」

「まあそれだけすごい人なんだからさ、近くで色々と学ばせてもらえよ」同僚は立ち上がり伸びをしながら言った。

「……まあ、いや……うーん」

釈然としない思いにかられながらも、田仲千紘は倉敷昌と打ち合わせを予定している会議室へと向かった。

「つまり榊は詐欺グループのトップだったというわけです」会議室。彼は手帳にメモをした情報を読み上げる。「榊の経営している会社を調べ上げました。『S.T.M.』という商品を目玉として

打ち出しているようですが、内容は全くのデタラメです。論文の投稿や効果のあった患者の声というのは、偽装データとサクラによるものでした」彼は首を振る。「データには再現性がなく、元患者とは連絡がとれません」

倉敷は相変わらず目を見開いてじっと田仲を観察している。「続けて」

「……加藤早苗の夫加藤誠は重い病を患っていました。加藤早苗は実際に榊と会ったことがあるそうです。榊は加藤誠を『S.T.M.』を使って治療する、といって彼女に近づいたに違いありません」

倉敷は片方の眉毛を上げて、怪訝な顔をした。話が事実ではなく、予測に突入したからだろう。その予測に倉敷は興味がないのかもしれないが、田仲は止まらない。

「そうして事件当日ついに榊は加藤家にまで足を踏み入れた。そこで加藤早苗はなんらかの方法で榊の詐欺師としての一面を見抜き、あるいはそこで何かしらの諍いさかいがあり殺害に至った、というのが僕の考えです」

「まあ、あの状況だったらそう考えるだろうな……」倉敷は含みのあることを言い背もたれにもたれる。「加藤早苗は見つかったのか？」

「いいえ、それがまだ見つかっていません……現在捜索中です」

「そう遠くに行ったわけではないだろうが、これだけ見つからないとなると、不思議としか言えないな」

「あの……」これまで視線をメモに向けていた田仲はここでようやく倉敷と目を合わせる。「倉

敷さんはどのように考えているのですか？」

「加藤早苗の居場所について、か？」

「それも含めてですが、この事件全体についてです。倉敷さん、あまり自分の意見を仰らないので……」

「そうだな——別に反論もなかったから言わなかったただけだが——ただその動機が不明瞭だ。相手が詐欺師だったからと言って殺す理由にはならない。それぐらいで殺したりするだろうか。遺体には争った痕もなかった」

「調べた所、榊のやり方は非常に狡猾でした。ターゲットの貯金額を徹底的に調べ上げ、そのギリギリの金額を引き出すのです。おそらく加藤早苗は二十万円以上の金額を要求されたのではないのでしょうか？ それだけのお金を貯めるために相当の苦勞をしたはずです。夫婦の努力の結晶です。その努力を踏み躪^ころうとする敵を家の中に招き入れたとなれば、正常な判断がつかなくなってもおかしくないのでは？」

「もしも金がすでに榊のもとに渡っていたのであればお前の言うことは分かる。しかし、加藤家の口座を調べたが不自然に大金が動いた痕跡はなかった。だから榊のことが詐欺師だと気がついたのなら一言『出て行け』と言えば良かったんだ、違うか？」

「まあ確かにそうかもしれないけど……けどまともな判断が出来れば殺害なんてしませんからね。なんとも言えません」

「それは限りなく逃げに等しいな」倉敷は微笑み、話を元に戻す。「加藤早苗は榊を家の中へと

招き入れた、となれば彼女はその時点では榊を詐欺師だと見抜けていなかったことになる。もちろん榊に何らかの弱みを握られた、など考えられる可能性はある。それでも、『加藤早苗は最後まで榊が詐欺師だと見抜けなかったのではないか』というのが俺の意見だ」

「え……ええと。それはつまりどういうことですか？」

「調べた内容を見る限り榊は——こういってはなんだが——非常に優秀な詐欺師だ。相手の弱いところを正確に狙う手立てをよく知っている。そんな彼が金も受け取っていないこの時点で、加藤早苗を逆上させるとは考えにくい、というのが俺の印象だ」

「そうかもしれません……けど」 田仲はこれと言った反論を思いつかなかった。

「もっとも俺の意見も根拠はない。ただ、どうしても彼女が榊を殺すとは思えないんだ。加藤早苗にとって榊甲丞つまり『S.T.M.』は夫を生かす最後の望みなのだから」

田仲はそれ以上何も言えなかった。

加藤早苗が榊を殺す確たる動機はない、しかしあの現場の状況からは加藤早苗以外に犯人は考えられない、それもまた事実であり、だからこそ加藤早苗の発見は現在の最重要課題だった。

事件の前日、加藤早苗は夫である加藤誠の病室を訪れていた。いつものように体を拭いてあげたり、話しかけたり、身の回りの世話をする。昨日と何も変わらない日々。

「ねえ……」 看護師がいないことを確かめてから早苗は夫に相談する。「私、一体どうすればいいのかな」

彼女が榊甲丞から提示された金額は三千万。それはこれまで加藤誠と共に貯金してきた金額でなんとか支払うことができる金額だった。

三十代で夫婦でこれだけの額を貯めるのはある程度の努力が必要だった。食費も切り詰めたし旅行に行くなんていう贅沢もせず、暇を見つけてパートの掛け持ちもした。夫も早苗自身も休みなんてほとんどなかった。そこまでしてお金を貯めたのには一つの理由があった。

夫、加藤誠は勤務医だった。誠の目標は地元で開業医になること。そのための資金としての三千万円だった。ありきたりな夢かも知れないが医者不足の地元を救うのが夢だと時折話をした。早苗自身はありきたりだなんて思わなかった。高校、いや小中学校からの努力の積み重ねがなければ医者になること自体難しい。元々医者になりたくて、しかし高校でその夢を諦めた早苗にはその努力の重みがよく分かっていた。

「あなたは『S.T.M.』をすべきだと思っ……？」彼女にできることはそうやって聞くことだけだった。

もはや夫の命を救う方法が現代医学においてははない、ということをはっきりしていた。こうやって意識のない夫を生物学的に生存させておくことが精一杯だ。しかしそれでは夢は叶わない。いやまともな会話を交わすことすら不可能だろう。

未来が分かればよいのに、と早苗は思った。何度もそう思った。この思考の袋小路から抜け出すためには未来の情報が必要だ。夫に元気になって欲しい。元気になって欲しいが現代医学では助かる方法はない。助けるためには『S.T.M.』を行うしかない。『S.T.M.』を行うには夢のため

に蓄えてきたお金が必要だ。——という思考の袋小路。もしも『S.T.M.』を試してみたが夫には効果がなかった、という未来の情報を知っていれば、その袋小路から外に出ることは出来る。その時には夫の死を受け入れる、という代償が伴うけれど。

「私は……っ」気がつけば早苗は自分が置かれている状況を洗いざらい誠に話していた。言っていることはめちやくちゃで、とりとめもなく、独り言のようだった。しかし話すことによって彼女は天啓を得た、心地になった。

——『S.T.M.』を試してもらおう。

それが彼女が得た天啓だった。それは実に簡単なことだった。失敗しても副作用はないと聞いていたし、もし嘘だったとしても、お金を払うだけでよい。つまりあの榊甲丞という男に募金するだけのこと。いずれにせよ『未来を知る』ためにはこれしかない。

それにこのまま何もせずにとただ誠を死なせるなどということは彼女にとって有り得ないことだった。

「話を聞いてくれて有難う。……榊さんに連絡するね」

彼女は携帯電話を手に取り病室の外に出ようとする。もはや悩みはなかった。このまま何もせず夫の死を見届けるくらいなら、三千万円をドブに捨てることになっても構わない、という強い気持ちにすらなっていた。

彼女がその天啓を得た理由は明らかだった。どうしてもっと早くそのことに気が付かなかったのか。

一方で、だから彼女はその小さな音を、声を見落としたのだ。

「あ……」

病室の外に出ていく彼女の背中を追うように、衰弱しきった男の手が彼女に向かって少しだけ伸ばされていた。

「もともと加藤早苗と榊甲丞はどうやって知り合ったのだったかな」赤信号。車が止まったタイミングで、助手席に座る倉敷昌は確認するように問いかける。

「あ、それは調べがっついていきます。押収したパソコンにメールの履歴がありました。どうやらインターネットサイトを見た早苗が榊にコンタクトをとったのが始まりのようです」運転席に座る田仲は携帯電話を操作してそのサイトを表示し、倉敷に見せる。「このサイトです」

倉敷は携帯電話を受取り、サイトの内容を確認する。そうしている間に信号は青に変わり、田仲はアクセルを踏んだ。

「うん」十二、三分ほどでサイトをひとしきりチェックした倉敷は携帯電話を田仲に戻す。「大体分かった」

「どうでした？」

「非常に上手に作られていると感心したよ。このようなサイトはいくつかあるが、他とは違う。胡散臭さがない。それを上手く消している。非常に簡単な例を出すと、例えばテレビで取り上げられたということや、医学雑誌に取り上げられた、ということを下品な惹句じやくとして用いるのでは

なく、ただの事実として書いている。『過剰な宣伝をしない』というやり方だ」

「しかし宣伝をしないのならそもそも名前が広まらないのではないですか？」

「そう、だからテレビで不自然にならない程度に取り上げてもらったりする。……それに、ネットでの本質はこっちだ」倉敷はバックミラー越しに田仲に携帯端末の画面を見せる。

「それは、掲示板、ですか？」

「ああ。加藤誠と同系統の病気に関する掲示板、ブログ、その他のSNSをチェックした。そのうち七割近くは同一のIPアドレスからの書き込みで、二割はIPアドレスに改ざんの可能性があった」

「つまり実際に書き込みを行っていたのは榊甲丞だったということですね」

「あるいは榊に雇われた人間だな。榊はこのようにネットで情報を得ようとするものに対して罠を張っていたのさ。結果多くの人間は『S.T.M.』について調べる。行き着いた榊のサイトは巧妙に体裁を整えているから質が悪い。公明正大を装った榊のサイトとSNS上のポジティブなレビューによって榊は莫大な富を得たはずだ」

「……はい」田仲は心の中で頷く。詐欺によって得た財産に嫌悪感を覚えた。

倉敷の言う通り、榊甲丞の口座には億を超える金額が確認されていた。それに榊が標的を騙すために呼び込むビルも都市の中心部にあり、家賃だけでも月に百万は下らない。その上サイトの運営、情報操作、榊同様に標的と直接対面する部下に対する報酬、それらにかかる費用のために多くの金が動いていた。

事件後、榊甲丞の偽医療グループについての捜査は進んだが、やや横道に逸れてしまったという印象は拭えない。普段であれば警察も構いきれないような情報サイトと詐欺にも等しい誇大広告。この手の嘘は挙げていけばキリがない。肝心の加藤早苗の行方も凶器も見つかっていないのだ。それに倉敷はずっと『ある一つのこと』で悩んでいる。

「倉敷さんは、殺害の動機、分かりましたか？」

「まだ分からない。俺には分からないんだ。あの殺害場所と動機と加藤早苗を結びつけるもの俺には理解できない」倉敷は頭を抱えてドアフレームに肘をついていた。

「……意外ですね。倉敷さんにまだ分かっていないことがあるとは思いませんでした」と、言う代わりに田仲は相槌を打った。倉敷と組んで数日、多くのことは倉敷の力によって解決に向かいつつある。榊甲丞の組織についても恐らく倉敷は田仲の二倍以上は調べていたに違いない。言葉の端々にそれを匂わせている。倉敷の力によって様々な課題が解決されつつある——加藤早苗の行方もその一つだった。

「なあ、田仲。加藤早苗の立場になって考えて欲しいんだが」そのとき、田仲はバックミラーで倉敷に睨まれているのをはっきりと感じた。「もしもお前の大切な——例えば妻が医者にも見放されるほどの病気に罹って、そこに僅かな可能性として民間療法を提示されたら、民間医療を試してみようと思うか？」

「急にそんなことを言われても困りますね」田仲はさっと目を逸らす。運転に集中するためだ、と自分に言い訳をする。この時の倉敷の目の真剣さは目が合うだけで痛みを覚える程だった。

「金額と、実際に効果があるかに依るんじゃないですか？　でも榊のやつは論外です。あんな人を騙すようなものには引っかけりませんよ」

「それは今だからこそ言えることだ。榊の論文の反証は一部でしか公開されていないし、ネットでは榊の方法は六、七割は効果があると宣伝されている。その上、榊は相手によって求める金額を変える。俺たち警官ならそうだな——七、八百万といったところか。加藤誠の病状はかなり進行していたようだから成功率が下がるという印象があったとしても、手術の必要もなく副作用の心配はないと喧伝されるこの治療法をお前は試さないのか？」

「ど、どうしてそんなことを聞くんですか？」　田仲は回答をはぐらかす。「事件とは全く関係ないじゃないですか」

「いや。関係ある」　倉敷は即座に断言する。「だから聞いているんだ。田仲。お前は『S.T.M.』を試すのか試さないのか」

「分かりませんよ。その時にならないと」　田仲は回答をはぐらかす。

「だから想像して欲しいんだ。明確に」　倉敷は更に追及する。「妻が病気になってもう治らない。意識も戻らない。相談できる人もいない。そんな孤独な状況を」

その言葉に引きずられ、田仲の脳に二つの像が浮かんだ。それは妻の後ろ姿とよく遊んでくれた祖母の葬式、その幻影だった。

「いい加減にしてくださいよ」　田仲は回答をはぐらかす。「運転しているんですから、余計なことを考えたくはありません」

「いいや、考えなくてはいけない」倉敷の尋問は決して止まらない。「俺達は死について考えなくてはいけないんだ。俺たち警察官は」信号が赤になり車が停まる。それを見て倉敷はミラー越しではなく直接田仲を睨む。「お前は妻を見殺しにするのか、それとも高価な民間医療を試すのか——」

「関係ない……警察官だとか、そんなこと関係ないですよ」田仲は必死で時間を稼ぐ。何の意味もないと知りながら。

田仲の頭の中で榊甲丞の遺体の像がはっきりと蘇る。それは暗闇の中で突然映された映画のような眩さで再生された。事件資料で見たはずの写真なのにやがて榊の姿から妻の姿へと変わっていく。

妻の死を連想してしまう。

「事件、医療、宗教——人の死の近くにいる人間は人の死を直視しなくてはいけない。考えて飲み込まなくてはいけない。そうしなくては死に囚われるからだ」

「僕は……」田仲は何かを言おうとした。言おうとして倉敷と目が合って気圧される。

彼はそれから黙り込んでいた。答えたくなかった。いや、答えたくないどころではない。それよりもっと酷い——

何を言うべきかは始めから決まっていたのだ。

「そんなこと、考えたくもないですよ！」彼は倉敷の言葉を遮るように叫んだ。

「ああ、そうか」倉敷は脱力するような声で言った。取り乱す田仲に失望したわけでもなく、か

らかっているわけでもない。何処か諦観したような響きがそこにはあった。それは何かを納得したような諦めだった。「分かったよ。有難う。きつと加藤早苗もそう考えていたんだな」

そこは田舎にある診療所——になるはずだった場所だった。

加藤早苗がいる部屋は八畳ほどの洋室。家具は何も置かれておらず、電気もつけられていない。昼だということにとても暗く、まるで時間が止まっているかのようだ。彼女はその部屋で足を抱え蹲うすくまっている。外界とのあらゆる交信を拒絶するかのよう。

数日前——何日前なのか彼女は認識していない——彼女は自宅で人が死んでいる光景を目撃した。榊甲丞。彼がいたことによって彼女は悩み苦しんだし一方で縋りつくことで救われた。あの日は本当は治療法について本格的に説明を受ける予定だった。それだけのはずだった。それなのに……どうして。

彼女があ部の部屋——誠の書齋——に足を踏み入れたとき、榊甲丞はすでに事切れていた。しかしよく見るとまだ乾いていない血潮、体温の残った体。死後間もないことは明らかだった。だから彼女は僅かな生存の可能性に賭け警察に加えて救急車を呼んだのだ。それがたとえ事を大きくすることになったとしても、あの状況ではそれ以外に選択肢はなかった。

「私じゃない……」誰もいない部屋の中で加藤早苗はかぶりを振った。何かを振り払うように力強く。「……ああ！」部屋の中に金切り声が響き渡る。

このままでは駄目だということは分かっていた。全てから逃げるためにここにやってきた。し

かし逃げ切れない。警察でも榊甲丞でもなく、他ならぬ彼女自身が彼女の心を追い詰める。もう何度も榊甲丞が倒れているのを目撃したあの時間に意識が飛んでいた。加藤早苗の罪悪感が彼女に榊甲丞の姿を見るようにと促すのだ。

「一体どうして……」加藤早苗は考える。

よりにもよって私の家で。そのせいで私はこんなにも苦しい思いをして、ここに何日も引き籠もっている。こんなことをしている場合ではないのだ。一刻も早く帰らなくてはいけない。私は誠さんを救わなくてはいけない。助けられるはずなのだ。『S.T.M.』さえあれば……。

——『S.T.M.』？

どうやって使うのだろう。

誰に頼めば良いのだろう。

榊甲丞が死んでしまったのだとしたら、私は一体誰に縋ればよいのだろう。大丈夫。きっと大丈夫。彼のクリニックに相談すれば治療は受けさせてもらえるはず。それにあの男が死んだと決まったわけじゃない。

治療は受けさせてもらわないと。

もう決めたのだから。

納得するまでやると決めたのだから。

「……え？」彼女は何かの音を聞いた。人通りの少ないところにあるこの建物の中はとても静かで、だからその音は彼女の耳に異音として届いた。

それは車の音だった。一日に二、三回は車の音が聞こえることもあった。もちろん正確な数など数えていない。ただ彼女が今聞いたのはこの建物の前に車が停まる音だった。この建物に用事がある人など考えられず、彼女は気のせいだと思った。そう思うように努めた。それも手伝ってどんな車が停まったのか、誰がやってきたのか、彼女は確かめようとはしなかった。

何より、もうどうでも良かった。車から降りてきて、この建物の中に入ってくる者が強盗だろうと、詐欺師だろうと、警察だろうと彼女は逃げるつもりはなかったし、それ以前に動く気力が残っていない。

扉を叩く音が聞こえた。

五分ほど前のこと。倉敷昌と田仲千紘は目的地まであと一步のところまで迫っていた。

「不躰なことを言ってすまなかったな」倉敷は田仲に誠意をもって謝る。「ただ必要なことだったんだ。これでようやく理解した」

「あの……結局さっきの質問が事件とどう関係があるか、僕には分からないんですが……」田仲は未だ一切の説明を受けていない。倉敷が謝るまでの数分間、二人の間は沈黙が支配していた。

「そもそも今回の事件において物理的に不思議な点は全く無いんだ。だから極端な言い方をすれば世界中どこの誰であろうと榊甲丞を殺すことができたんだよ」

「それは本当に極端な言い方では？ 大体不思議な点がないと言っても凶器が見つかっていませんし、それに加藤早苗以外では犯行は不可能です。まず家の中に入れない。その意味で加藤早苗

以外にはアリバイがあります」田仲は話を逸らされた気がして、少し苛立つ。

「例えば使われた凶器が爆弾であったとしよう」倉敷は田仲の言葉に間髪入れずに答える。「その場合ボタン一つでどこからだろうと実行可能だ。ネット経由であれば世界中どこからでも榊甲丞を殺害できる」

「榊は刺殺されているんですよ？ その仮定は成り立ちません。それに爆弾であったとしても、破片や痕跡はどうしても残ります。消えるわけじゃありません」

「だから『例えば』の話だよ。事実じゃない。分かり辛いのなら殺されたのはAさんということにしておこうか？」

「いいえ、構いません。話を遮ってすみませんでした」田仲はややぶっきらぼうに言った。自分でも不機嫌になっているのが分かる。そんな場合ではないと理解はしているつもりなのに……。

「続きをお願いします」

「この仮定の上では容疑者を絞り込みようがない。もちろん最も近い場所にいた加藤早苗を安易に容疑者リストから外すべきではないだろう。しかしそのリストの名前はあまりに膨大だ。なにせその時刻に生存していた全ての人類が容疑者に残るんだから。いや時限装置を使えばもっと容疑は膨れ上がる」

「やっぱ無理ですよ。想像できません」田仲は呆れたように言う。「なんとというか飛躍しすぎていて……現実的ではないですよ。仮定の話だと分かっていますが……」

「お前はきっと『殺害には動機がある』と無意識の内に考えている。だからそう考える。殺人に

は多大な労力がかかる。名も知らない人間を殺すためにそれだけの労力を払うとは考えられない。違うか？」

「ああ、なるほど」田仲は『仮定の話』が何を意味するのかをようやく理解する。「つまり倉敷さんの思い描く世界では、人は見たこともない赤の他人を殺すために一生懸命になる、ということですね？ とんだ世紀末じゃないですか」自分で言っていてすぐに馬鹿馬鹿しいと感じる。彼は倉敷が実はふざけているのではないかと、疑い始めた。

バックミラーを見る。倉敷の表情は真剣そのものだった。次の言葉で彼は一気に現実を引き戻される。

「そう、だから仮定ではない俺たち警察は動機があつたかどうかを重要視する。現実の世界では、ほぼ全ての事件で殺人には動機が伴うからだ。時にその動機が存在が俺達の目を眩ませることになつたとしても、それがもっとも可能性が高い手法だと俺達は経験的に知っている」

「そんな……そんな当たり前のこと、言われなくても分かっています」

「分かっているさ。ただ一応確認をしただけだ。『物理的要因』と『心理的要因』は分けて考えるべきである、ということだな。俺から見ればお前は『加藤早苗が被害者に最も近いところにいる』という『物理的要因』を捨てきれないでいる。『物理的要因』なんていくらでもごまかしが利く。それは過去の事件、古今東西のミステリー小説が証明している」

「『心理的要因』の方が曖昧で、いくらでも言い訳ができますと思います。『物理』と『心理』であれば僕は前者を優先して考えるべきだと考えます」

「人それぞれ考え方はある。だから俺の考えを述べている。俺は『心理』を優先する。動機を理解し、その後で動機に沿うようなトリックを検証する。計略のようなものは後から見えてくる」
倉敷はそこで言葉を区切った。

田仲は考える時間を得た。

つまり倉敷と田仲は思考する順番が逆なのだ。『物理』を優先する田仲と『心理』を優先する倉敷。それを知った瞬間、田仲は理解した。どうして倉敷は動機についてそこまで悩むのか、ということ。——それが彼の最重要項目だからだ。

そしてだからこそ、倉敷は田仲をあそこまで問い詰めたのだ。人は自分の感情は理解できても、他人の感情までは理解できない。他者の感情の理解とは自分の中にあるものから掬い上げられたものでしかないからだ。

「……僕のことには役に立ちましたか？」倉敷の行動の『動機』を理解した田仲は尋ねた。

「ああ。とても参考になったよ。——忘れていたんだ。俺は。親しいものの死を突きつけられる状況がどんなに恐ろしくて、目を逸らしたいものであったかを。心の底からそんなふうに考えていたときのことを」

「……犯人は分かったんですか？」

「あくまで俺の考えではあるが、犯人は恐らく——」倉敷は次の一言を言えなかった。「ああ、あの真っ白の綺麗な建物が、そうだ」運転している田仲に目的地を指差した。

田仲はもどかしい気持ちを感じたがここで情報を共有するために時間を割くよりも第一発見者

であり通報者でもある加藤早苗の発見は重要だった。

「にしても倉敷さん。本当にこんなところに、加藤早苗がいるんですか？」

「逃げ込むとしたら、ここが最も確率が高いだろうと考えただけだ。いるかどうかはわからない……」
田仲は嫌な気持ちになった。倉敷の態度にはなく、この田舎町の雰囲気が好きになれない。彼らがやってきたのは隣の県の外れ。至る所に売地と書かれた看板が立っている。途中で見かけた商店街はもはやシャッターが下りていない店のほうが少ない。二十年ほど前に栄えた田舎という表現が似合う町だった。おまけに天気もどんよりとしていて、いつ雨が降り出してもおかしくない。

倉敷が車を止めるように指示する。車を降りると真新しい建物がそこにはあった。辺りの建物と比べるとデザインも雰囲気も全く異なっている。看板の枠はあったがそこにはまだ何も収まっていなかった。

倉敷は躊躇わずインターホンを押すが音が鳴らない。それで扉を叩くも返事はない。それを三度ほど繰り返して、田仲は帰ろうと考えたが、倉敷は建物の鍵が掛かっていることを確認すると、家の中へと入って行く。田仲はそれに付いて行く。電気が点かないので、倉敷は携帯電話を懐中電灯代わりに使った。

「ここは……病院だったんですか？」田仲は小声で尋ねる。

「いいや、完成途中の病院だ。加藤誠の夢の途中だな」倉敷はそれだけ言った。

建物の中はロビーと診察室、そしてその奥に検査室になるであろう場所があった。検査機材などはなく、パーティションと雰囲気でそのように田仲は察する。建物の外観に相応しく中も非常に落ち着くデザインになっていた。電気が通じ、至る所に張られている半透明のビニールシートをとればの話であるが。

一階を一通り見て回り、誰も居ないことを確認すると、二人は二階に上がった。一階と違い、二階はまだ完成が見えず、広いスペースとその奥に一つ扉があるだけだった。この広いスペースを将来的には一階のように区切って使用するのだろうか。

倉敷と田仲はそそくさと奥へと向かい、倉敷が扉をロックする。「加藤さん。居ますか？」返事はない。

田仲は自分が緊張していることに気がついた。もしここに加藤早苗が居なかったとしたら始めからやり直さなくてはいけないかもしれない。一方でもし加藤早苗がいたとしたら、どのような状態であるか想像がつかない。錯乱状態にあるかもしれないし、あるいは死んでいるかもしれないのだ。未知の存在を隠した扉は田仲の心を不安にさせる。

倉敷は玄関の扉と同様に鍵が掛かっているのを確認すると、躊躇なくその扉を開けた。

「加藤早苗さんですね」

その部屋の中には一人の女性が居た。田仲の不安は杞憂に終わり、二人は警察手帳を開き彼女に見せた。膝を抱えて座っている彼女は首だけを動かし、二人の存在を確認すると再び頭を両膝

の間に落とした。挨拶も返答もなかったがその時見せた顔は間違いなく加藤早苗のものだった。「要件は……分かっていていると思いますが、榊甲丞殺害の件で来ました。もしよければ署までご同行頂けますか？」

早苗は返事をせず、顔を伏せたまま微動だにしなかった。さらに髪で顔が隠れてしまって表情を読むこともできない。倉敷は早苗に近寄り、膝をついて、彼女の肩に手を置く。

「幾つか聞きたいことがあります。凶器を持ち出したのはなぜですか？ 凶器をどこに隠しましたか？ 犯人を目撃しましたか？ どうして警察に電話した後で貴女は現場を離れたんですか？」倉敷は矢継ぎ早に問いかける。早苗は反応しない。彼の鋭い瞳も目が合わなければ何の意味もなさないので田仲は思った。

しかし一方で倉敷の言い方は反応しないことを見越しているようにも見えた。これはきっと警察がどこまで捜査を進めているかという情報開示だ、と。

「多くの人間は現場に居た貴女を疑っています。第一発見者であり、その後逃走した加藤早苗が榊甲丞を殺した……」倉敷は語るように問いかける。早苗は反応を示さない。「このままでは貴女が犯人になってしまう。それはきっと誰も望んではいけないことです。きっと加藤誠さんも——」倉敷がその名前を口にしたとき、加藤早苗は勢い良く顔を上げた。

「あなたは……」加藤早苗は倉敷の目を見て静かに呟いた。

「はい。私は貴女が犯人であるとは思っていません。あの段階では貴女に榊甲丞を殺す動機はないからです。貴女は本当は榊に夫を治療してもらおうことを望んでいた。違いますか？」

「それは……」加藤早苗は口ごもった。その表情は肯定しているようにも否定しているようにも見えた。

それを見て倉敷は一度田仲の方に視線を移す。何かを確認すると、再び視線を早苗に戻した。「望んでいた、という言葉を訂正しましょう。加藤早苗さん。貴女は未だ『S.T.M.』を受けることを望んでいるのですかね？」

「はい……」早苗は小さく頷いた。

そんな馬鹿な、と田仲は叫びたかった。『S.T.M.』なんて嘘っぱちだ。そんなものをまだ信じて、縋っているなんて。彼は自分が榊甲丞の組織について調べた内容を洗いざらい教えてやりたくなった。馬鹿な考えはよせ、と年寄り臭く論じたかった。

「加藤さん。残念ですが、榊の言っていることは全くの出鱈目です。『S.T.M.』なんていうものは存在しません。いや、貴女はそれをもう、知っているはずだ」倉敷は力強く言った。彼も苛立ちを隠せないでいる。田仲は、初めて倉敷の素の感情を見た気がした。

しかし田仲にとっては疑問だった——どうして早苗が『S.T.M.』が嘘だと知っていると倉敷が考えているのか——倉敷は続ける。

「今から言うのは私の憶測です。独り言だと取ってもらってもいい。——貴女はずっと『死』が関わることについて選択することから逃げてきた。加藤誠さんの死、榊甲丞の殺害。そして夫の夢の喪失についてずっと考えないようにしてきた。だから私には分かりませんでした。貴女『達』の動機がです。今回の件は貴女が死に向かいあっていれば、話し合いで終わることでした」

「やめて……下さい」早苗は訝しむのではなく、話を聞くことを拒絶した。それは倉敷が考えている事実が正しいことを意味していた。

二人の間で前提となっている『事実』。

「貴女は今でも逃げようとしている。もっと早く事実と向き合うべきだったんだ。貴女は夫が衰弱きった姿を見て『S.T.M.』を本当に受けようと決意した。余命宣告を受けたとき、まだ旦那さんの意識はあつたはずです。そのときに決めていれば、こんなことにはならなかった」

「もう……」早苗は倉敷の言葉から逃れようと必死に耳を塞ぐ。明らかに苦しんでいた。

「向かい合わなくてはいけない。でなければ貴女のために、殺人まで犯した人の思いが無駄になる——それを貴女は誰よりも分かっているはずだ」

「やめて……やめてよ！」加藤早苗は突如立ち上がり、扉に向かって突進する。

田仲はそれを横から腕で差し止める。逃げている——田仲はそう思った。可哀想だとも思った。総じて感じたのは彼女に対する同情だった。

「分かっている……分かっているのよ……全部……始めから」加藤早苗は退路を阻まれ、その場に崩れ落ちた。そのとき、床の上に何かが落ちる音がした。それは血の付いた一本のメスだった。

倉敷は立ち上がっており、加藤早苗の後ろ姿を見ていた。彼女がこれ以上『逃げない』と判断したのか、彼はそれ以上早苗には近付かず言った。「——犯人は加藤誠ですわね」

加藤早苗は静かにその場で頷いた。その目には光が宿っていなかった。

「こんな仕掛けなんて信じられませんか」

数日後、署内の一室で榊甲丞殺害のために用いられた『仕掛け』の動作試験が行われていた。倉敷と田仲はそれを見学。『仕掛け』は動作し、狙い通り人形の喉元にメスの刃が突き刺さる。

「なんだか納得いかないなあ〜」田仲は独り言を言う。

その仕掛けはこのようなものだった——金庫の中にボウガンのような発射装置が仕込まれていて、金庫が開けられると、それと同時にボウガンのストッパーが解かれメスが高速で射出される

現場ではその金庫は書斎の奥にある出窓の前に釘で固定されていた。

「この装置が購入されたのは二年ほど前……」倉敷は腕を組みながら言う。「元々はメスではなく、カラーボールが入っていたらしいがな」

「いつメスと入れ替えたんでしょう？」

「さあな」倉敷は息を吐きながら答える。瞳は田仲を捕らえているものの、いつもの覇気はなかった。「よほど自分の財産を盗られたくなかったか……それは今となってはもう分からない」

田仲には倉敷の気持ちが見えなかったような気がした。

加藤誠は事件から三日後、警察が逮捕令状を持って病院に乗り込む前に息を引きとっていた。

加藤早苗は凶器を隠した罪に問われているものの、執行猶予付きの判決に落ち着くのではないか、というのが大方の見方である。

「加藤早苗は夫が犯人であるはずぐに気がついていたのでですね。だから凶器を持って逃げ出した」

「あの時点で榊を殺す動機があるものは彼を詐欺師だと知るものしかいなかった。そしてまた加藤早苗が凶器や犯人を隠匿しなければと考える人物は加藤早苗本人か、加藤誠以外に考えられなかった。だから、当然の帰結……と言えば、そうかもしれないな」

「でも、僕には分かりません。どうして加藤誠は榊を殺したのでしょうか。彼も榊が詐欺師であるとは知らなかったはずなのに……」田仲は自分の中に降って湧いた疑問を倉敷に問いかけ、同時に考え込む。「あ、そうか。加藤誠自身医者だったから——」

「分からないさ」倉敷は振り返り、部屋から出ていこうと、ドアノブに手を掛けた。「すべての真実はもう闇の中だ」

田仲は倉敷の後を追いかける。廊下を通り、しばらくすると喫煙所に辿り着いた。倉敷は内ポケットから煙草とライターを取り出し、火をつけ口にくわえる。田仲も「一本いるか」と誘われたが断った。

「それよりも、どうして加藤誠が榊を殺したか、ですよ」

「こだわらな」

「だって、倉敷さん。動機は全て分かったみたいなこと言ってたじゃないですか。倉敷さんの意見を聞くまで納得できません」

倉敷は語りながらなかった。彼にはそれがどうしても無駄なことには思えたようだった。しかしやがて諦め、語り始めた。

「恐らく、榊と誠はどこかで対面していたのだろう。多分、それはつい最近だ。まともに意識が

「あつた上で考えられた計画だとは思えない」倉敷の言葉に対して、田仲は横槍を入れずに聞き入る。何故か分からないが田仲は倉敷が全てを語ると確信していた。「誠は当然、自分が早苗の夫であることを明かし、榊を病院に呼び出した。誠は多分論文のデータも見ずに、『S.T.M.』が偽物である可能性を感じた。誠は大学病院の勤務医だ。この手の連中を見かける機会は多かつただろう。しかし榊は成果が出ていないだけで、病気を治そうと努力する研究者かもしれない。誠はこれを判別しなかった。そこで財産が奪われないようすべて妻にいくよう仕掛けておいた罠を利用することにした。方法はシンプルだ。金庫の場所と暗証番号だけを榊に伝えればいい。ついで中に何が入っているかを教えられれば完璧だ。この金庫の扉を開ければ榊は富に目が眩んだ略奪者だと判別できる。同時に、さっき見た『仕掛け』で略奪者を消し去ることも可能だ。ただ、その光景を見た加藤早苗がどう考えるかまでは、考えていなかったのかもしれないがな」

「納得できません。自分は例えどんな状況にあつても人を殺すことは許されないと思っています」

「俺だってそう思う。彼のやったことは明らか間違いだ。殺人以外にもいくらでも方法はあつた。……だがな。それでも一つだけ確実なことがある」

「確実なこと？」

「加藤早苗は救われたということだ。今は失意の底にいて、何も希望が見えないだろう。だがそれでもいざれ救われる。いや彼女だけではない。救われたのは榊甲丞に惑わされた人々だ」

「榊甲丞……」田仲はその名前を噛み締める。榊甲丞。彼はこの事件の被害者であつたがしかし

彼は詐欺師だ。正義を執行するはずの田仲はしかし彼を裁くことはできない。「榊甲丞は死ぬべき人間だった、ということでしょうか」

「人はいずれ死ぬ。そういう意味では人間は皆死ぬべき人間だと言えるな」灰皿に煙草を押さえつける。それは彼なりのジョークだったのかもしれない。「しかし善悪の話をするならそれを決めるのは俺達じゃない。確実なことは俺たち個人には誰かを殺す権利はないことぐらいだ。『逃げずに』自分の責務を果すだけだ」

「僕は正直……加藤早苗に対してそこまで否定的にはなれません。僕にだって両親がいます。妻がいます。子供もいずれ出来るでしょう。僕が愛する人達が病気に罹って普通にやっても治す方法がなくてそれでも僅かな希望があったとしたら僕はそれに縋ってしまうと思います。いや、試さないわけにはいかない。万が一だろうとそこに可能性があるというのなら実際にやらないといけない、そう思うんです」

「分かるよ。そう考えていた時期もある。だが俺は……」倉敷は珍しく田仲から目を逸らし、二本目の煙草に火をつける。「俺はとことん調べ上げる。信じるべき専門家を吟味する。俺や俺が大切にする人が生命の危機に瀕したとなればあらゆる情報を手に入れようとする。その上で一つ一つの情報が正しいのかもまた調べ上げるだろう。そして可能性が低いと判断した治療法は行わない。少なくとも俺の意志では」

倉敷の心はすでにここにはなかった。彼は田仲と話しているようで実際は何か別のことを考えている、そんな印象だった。

「参考までにその理由をお聞かせ願いますか？」

「治療している時間をもったいないからさ。治る確率が低い方法を試し、調べている間、苦痛な状態が続くより、治らなくても——たとえ最後は死んでしまっても——苦痛が取れる方法を選択する。そして少しでも楽しい時間を過ごせるように努力する。そうしたほうがより高い確率で『生きる』時間を延長することができる」

「自分には……そんな考え方はできません。あまり……考えたくもありません」

「ああ、そうかもしれない。死について考えるのは恐ろしいものさ」

それにしては先輩は冷静な考え方ができますね、と田仲は言おうとし、思い止まった。彼の脳裏を掠めるものがあつたからだ。

「倉敷は前日に『嫁が亡くなった』日でも仕事をしていた」

それは同僚から聞いた噂だった。

初めは精神力の強い、すごい人だと思っていた。

だけどそれはただの勘違いでしかなくて、そして倉敷は自分の何倍も死について考え結論を出したのではないか。結論を出し、決めた上で自分の気持を押し殺し、忘れるように努めたのではないか。

だから田仲は何も言えなかった。

死に囚われないためには人の死を直視しなくてはいけない、考えて飲み込まなくてはいけない。しかし同時に死について考えるのは恐ろしいものである、という倉敷の言葉が柿甲丞の遺体のイメージと共に何度も蘇っては消えていった。

（大学院自然科学研究科機械システム工学専攻修士課程二年）

天萌ゆる

苛屋

雲を土に、空を水に、そして、生きとし生きるものすべてを陽光にして、咲く花々がある。

紫苑は河原の土手に仰向けに寝そべったまま、そんなことを言った。

「へえ」

隣に座っていた僕は適当に返事をして、傍らに生えていた名も知らぬ草をむしりとった。ちぎられた草は何の罪もないのに、風に吹かれて冥土へ飛んでいった。

「あっ、さては疑っているな」

紫苑がむくれて体を起こす。背中にひつついた草の葉を適当に払い、フウとわざとらしく息を吐いた。

「お前頭おかしいもん」

「あたま……」

紫苑は散々目を泳がせ、ついには空へと視線を向けると、頭おかしい、かあ、と僕の言葉を反芻して黙り込んだ。彼にしては珍しい反応だった。

「えっ、もしかして傷ついた？」

「傷ついた、というか……今日初めて己の日頃の言動を恥じているのだ。誰だって、初めての自分の気持ちには当惑するものだ。ボクは己や己の言動を恥じるのは初めてで、それはもう、当惑しまくっているのだ」

狼少年もこんな心持ちで喰われていったのであろうよと嘆いて、紫苑は膝を抱えて背中を丸めた。

「狼少年？ それってつまり、今までお前がたまに話してた、例えば、広い世の中歌を歌う校舎があるのだとか、踊る魚がいるのだとか、そういうのはやっぱり嘘だったということか」

「うんにゃァ、嘘ではない。ただあまりに詩的表現が行き過ぎただけだ。校舎はキンコンカンと鐘の音のような声で歌うし、魚の中でもトビウオは新体操の鬼コーチをも唸らせる見事なジャンプを披露する。イルカもまた然り。金魚や鯉も体をくねらせて尾びれを揺らす。あれが踊りでなければなんだと言うのか」

「遊泳だ」

ホンッと紫苑は妙な声を発した。

「それなら雲を土に咲く花とは何のことだ。ああ、もしかして、雪か。雪の結晶か。あれは確かに、イカしたソングライターは雪の花だなんて言うもんな」

僕の言葉を耳にした紫苑は、ちがァう、と間延びした声でそれを否定し、抱えていた膝を伸ばして、力の抜けた楽な姿勢をとった。

「それは本当だよ。何のロマンでも比喩でもなく、面白いように言葉の通りなのだ。そのまんまなんだよ。そのまんま。土から花が咲くのと同じくして、雲から若葉が芽吹くのだ。父がそう言っていた。間違いない」

「はあ」

今度は僕が仰向けに倒れ込んだ。

目の前に、まるで真っ青な画用紙を一枚だけ貼りつけたような、単調な色彩の空が広がった。

「お前と話すのは非常に疲れるよ。紫苑」

「誠に哀れではあるが、嫌ならさっさと帰ればいいんだぜ。たったそれだけで疲れずに済むんだ。ボクの頭がおかしいと言う前に、もう少し己の馬鹿さ加減を省みた方がいいんじゃないのか。なあ」

和樹。

皮肉っぽい言葉と、嬉しそうな声。そして紫苑は僕の名前を呼んだ。

空の光があまりに眩しくて。

聞こえないふりをしようとして。

僕は瞼を閉じたのだった。

*

紫苑というのは、僕と同じ学校に通う男子高校生であり、僕の友人である。彼は一見すると至極普通のティーンエイジャーなのだけでも、そのもやしっ子としか形容しえない凡庸な外見に、あまりにそぐわない多弁さと独特の感性を有している。そしてそのような彼の奇抜さに気圧される人間は多数存在する。結果として、当然のように紫苑は孤立した。

そうして生まれた、他者とのコミュニケーションを要しない環境は、彼自身の中にある空想の世界への没入を助長した。最も、そのことに関して彼に自覚があったかは不明である。

僕もかつては彼の異質さに気圧されたごく普通の男子高校生の一人であった。

それは高校に入りたての頃、紫苑の前の席に座るように割り振られた僕が、新入生特有の、孤立に対する恐怖感を抱いてしまったことと、その恐怖感に駆られて後ろの席のもやしっ子に軽々しく口をきいたのがきっかけであった。もやしっ子の持つ、気の弱そうな印象に油断したのである。

「よろしく。えっと、名前、何ていうの？」

根の暗そうなもやしっ子は俯いたまま答えた。

「モリタ。森田、紫苑」

「シオン？ 女の子みたいな名前」

その途端、もやしっ子は勢いよく顔を上げて僕の顔を視線で捉えた。

「女の子っぽい名前！ 女の子っぽい名前だって？ そんなことを今まで何度言われたか。指折

り数えることもできない幼子の時分から言われ続けたので正確な値は不明だが、おそらく千は越えたな！ 陰口も合わせれば三千は言われたであろう！ 三千！ 三千かよ！ 多いぞ。多すぎる。ああ辟易した！ 辟易した！ 辟易！」

まっすぐ僕を見ている。いや、睨んでいるのか。ともかく僕の顔を凝視したまま、もやしっ子は僕を責めているのか、はたまた愚痴をこぼしているだけなのかよくわからないことを、ジェット機並みの勢いでまくし立てた。僕は啞然として、まっすぐ見つめてくる彼の瞳に吸い込まれていた。ただただ、ああ顔にツバが飛んでくる……ということしか考えられなかった。

蛇に睨まれた蛙。気圧された瞬間である。

「もっと他に感想があるだろうに。しおん？ イカした名前だね、とか！ しおん？ 幽霊でも出そうな名前だな、とか！ しおん？ ショーンじゃなくて？ とか！ しおん？ そんな名前の花があったねえ、黄色い花だったっけ？ とか！ ああッ」

隣の席で談笑していた女子二人が僕たちを一瞥する。

「もう、うんッざりだ！」

と言い捨てて僕から視線を外し、もう一度彼は俯いた。

「う、うんざり？」

ああそうとも、うんざりさ。

紫苑というのは、亡き母がつけてくれた名前なのだ。

今後二度とあの人に名をつけられる者は現れまい。

それなのに、それなのに……。

構わないだろ、それくらい言ったって。そういうのに憧れる年頃なんだよ……。

俯いた彼が発する言葉は、初雪のように弱々しく舞い落ちては溶けていった。顔を袖で拭いながら、僕はその溶けた言葉の液体を、足の裏でじんわりと感じとっていた。感じとることができていた。

彼は傷ついたらしかった。

「なんか、悪かったな」

ごめん、と僕は言った。

「いや。うん、ま……こちらこそ。初めまして、だものな」

名前なんていうの、と今度のもやしっ子が僕に尋ねた。

「緑川」

「ミドリカワ？ 下の名前は」

「和樹」

「カズキ？ ……和樹。よろしく。ボクは紫苑」

さっきはごめん、と紫苑は言った。

それ以降も紫苑は度々僕やクラスメイト、教師、近隣住民やその飼い犬をも啞然とさせたものの、周囲も慣れると変な子だね、の一言で済ませるようになった。

彼と深く関わるのは疲れるとわかり、皆上手に距離を置くようになったのである。僕もそうしようとした。

しかしなぜかよくいっしょにいた。

孤立するくらいならこのマシンガントーカーの横で金魚のフンとして過ごす方がマシだというわけではない。それなりに話せる友人は他にもいたのだ。

「緑川はわかるのか？ 森田の言うこと」

なんてこともよく訊かれたが、僕は決まって、

「わかるかわからないかで言えばわからないな」

と答えた。すると相手もお決まりのように、

「じゃあ、なんでいっしょにいるんだ？」

と首を傾げた。

相手が首を四十五度に傾ければ、僕は九十度首を傾げた。

*

首が痛い。

下手くそな口笛が聞こえる。多分、風の音。

目を覚ますとびたりと風が止んだ。

僕は寝ぼけた頭のままで体を起こした。辺りを見回してようやく、ここがよく来る河原の土手で、僕は学校から家に帰る途中なのだとわかった。ついでに、紫苑が眠りこけた僕をほったらしにして先に帰ったということも。

髪や背中に貼りついた草の葉を手で払う。痛む首の筋肉をほぐそうと動かす。上へ、下へ、右へ、左へ、もう一度、上へ……。

空が見えた。

陽は傾き、空の青みは抜け落ち、どこからか雲が湧き出ていた。

——雲は土。空は水。

——生きとし生きるものすべては陽光。

ついさっき聞いた話が頭に浮かんだ。嘘なのだろうから聞き流せばいいものを、未だに記憶している。

すっかり重たくなった腰をあげる。

夏の終わり。金曜日の夕方。

草葉のにおいを混ぜた風が吹き、僕はそれを浴びながら歩きだした。

遠くの山の間顔を見せた、夕陽が燃えている。

感傷的。そんな言葉が頭に浮かぶ。そんな時間だった。

*

夢だ。夢である。夢でなくては困る。もう過ぎたはずのことなのだから。

母が真白い顔をして、かたく目を瞑ったまま、すっぼりと棺おけに納まっている。

ボクが幼子の頃の話だ。幼子の話のはずである。そうでなくては困る。

今ボクは、母の棺おけを目の前に、ああ母は死んだと思っっている。そして誰かの腕の中にいる。皺にまみれた、節くれだった、腕の中にいる。ボクはまだ小さいのだ。幼子なのだ。そうだ。それでいいんだ。

そしてその人は泣いている。ボクを抱いたまま泣いている。その人の隣に姉が立っている。姉はまだ十二歳である。十二歳であるとボクはわかっていた。ああ十二歳の姉がいると思いつながら、俯いたまま顔をあげない姉を見ていた。姉は少女であった。十二歳であるから当然であった。棺おけは閉じられた。

気づけばボクの目の前に母の骨があった。高い熱を帯びた骨だった。

背の高い男が、これはホニャララ、ホニャホニャ、そんなわけだいたいそうありがたいお骨で……などと言っている。きっと死体を焼く仕事をしている人だ。一体、どんな顔をしてこんなひどい他人事をのたまっているんだらう。

大人しくしているボクの頭を、ボクを抱える人がそっと撫でた。焼香のにおいがふわりと鼻腔に入り込む。ああ、この人は母の母親だ。今わかった。ボクの祖母だ。祖母は鼻をすすった。

姉はボクから少し離れて、ずっと後ろの方にいた。傍らにいた若い女に慰められるように肩を抱かれて、ずっと俯いていた。若い女は親戚だ。たしか、祖母のきょうだいの孫とか、そういうのだ。

よくわからない。

いつの間にかボクは外に出ていた。祖母はその場におらず、代わりに父が肩車をしてくれていた。

父は肩に幼い息子を乗せたまま、ぼうっと上を向いていた。煙突を見ているのではないというのはよくわかっていた。

「しおん——」

父はそっと指さした。天を指さした。天を指さした先には、何が、あるんだったか。

「くもをつちに、そらを見ずに、いきとしいきるものすべてを、おひさまのひかりにしてな」

ああ知っているよ、お父さん。何度も何度も、お父さんから聞いた話なんだから。

——はながさいているのでしょうか？

しかしボクは何にも言わなかった。天を仰ぐ父につられて、空を見上げるようなことはしなかった。ボクは俯いていたのだ。どんな言葉で話しかけるべきなのか、幼子のボクにはわからないのだ。

そこへ、うす紫色の小さな紙切れがひらひらと舞い落ちてきて、ボクの目の前に、正確に言え

ば、父の後頭部に、とまった。

手にとってみれば、それは花びらだった。

*

土曜日の始まりは遅い。目を覚ましたボクは亀のように首を伸ばして枕元の時計を見た。

午前十一時。

家には誰もいない。

——あなたは約束したっていつも遅刻するから……好きな時間に来ていいよ。

姉がそう言って弱々しく笑ったのを思い出した。もう一週間くらい前のことだった。そうだ、先週、次の土曜日に会いに行く約束したのだ。そのとき目にした姉の生白い肌の色と、点滴を打たれた腕までもが、じわりと蘇る。

「姉さんが入院したぞ」

かつてそう言った父の顔は、この上なく苦悶に満ちた色をしていた。大げさだな、どうせ貧血とかだろう、と言って笑って見せたら頬に平手打ちをくらった。そんなにひどい病気なの、と問いかけると今度は困った顔をして俯いた。

父は姉が一体何の病なのか、ボクにはっきりと言わなかった。

しかしボクも馬鹿ではない。幼子でもない。わかっている。かつて母が罹った病は遺伝性のものであるのだ。

父もボクが察していることをわかっているらしかった。

父は黙然として日々を過ごした。そんな寂々とした日々には耐えられなかったのか、父は頻繁に姉の元を訪れた。ボクもまた寂しいことも静かなことも苦手であったが、姉の元を訪ねるのは、それ以上に苦手であるようだった。

多分、棺おけが頭に浮かぶせいである。

真白い顔をした母が、すっぽりと収まっているのを、目にしたときの……。

嫌だ。

胸を打つ、柔らかくありながら重たい衝撃。血の代わりに涙が体中をめぐるような、気だるくて虚しくなる、あの気持ち。

姉の顔を、あの生白くて弱々しい顔を見ると、思い出してしまう。

正直、会いたくない。

でも、家族だから。

覚悟を決めたボクは、遅い朝食に冷たいパンを頬張って、出かける支度をした。靴を履いたときにはもう午後一時を回ろうとしていた。いつもだったら出かける準備なんて、朝起きてから三十分もあれば充分足りる。自分で思っていた以上に、ボクは姉に会うのを渋っているようだった。玄関の扉を開ける。当てつけのように輝く太陽の光を全身に浴びる。夏はもう終わりだという

のに、容赦がない。いい天気だ。うんざりするほど。

空は青く、雲は白く。

花は、なく。

花？ ああ、花。

——天に咲く花。

昨日和樹に話したことだ。結局あいつは、信じてくれないまま、疲れたとか言って眠りこけてしまったけれど。呆れて置いて帰って来てしまったけれど。

そんな昨日のことを思い出しながら自転車のペダルを漕いでいく。目の前の信号は赤を示している。錆びついた高音を鳴らしてブレーキをかけ、停止する。

天に咲く花。正直ボクも目にしたのか確かではない。あまりに幼い頃の、思い出すのも大変な日のことだったので、記憶はおぼろげである。もしかすると、父が事あるごとに何度も話すために、その存在を刷り込まれただけかもしれない。

信号が青に変わる。

地面を蹴る。自転車のタイヤは滑り出す。

それでも友人に、天に花が咲くと知ってほしかったのは——信じてほしかったのは、どうしてだったか。確かに、普通に考えてみればありえないことである。雲はただの水滴のかたまりだったと思う。地学は得意ではない。自分の名前を、女の子みたいだと笑われることの次くらいに得意ではない。……そこまではないか。とはいえ、確かそう習った。それなのに、種が埋まって、

芽吹くはずがない。ボクだっけとそう思っていた。今だっけ思っている。

あるいは、信じたくないだけ。

大きな通りをずっと進んでいく。やがて左手に、目当ての建物が見えてきた。

水を吸った綿のように、ずっしりと気が重くなる。緩やかなスピードでペダルを漕いでいたのに、息が上がる。緊張しているのだ。

病院の構内に設けられた駐輪場に自転車を止め、チェーンに鍵をかけながら息を吐く。深く、息を吐く。

病院という場所は、広くて、ざわざわと騒がしくて、そのくせにどこか寂しくて、気が遠くなる。

それでも行く。幾度か来ている場所だから迷いはしないのが、たった一つの幸い。

駐輪場を出て、建物の入り口を目指す。夏の残り香が熱気を帯びて、肌を焼く。それに加えて、靴底にもったままの熱がボクをいらつかせる。自転車を漕いでいるときは全身に涼風を浴びていて気がつかなかった。夏の終わりなんて、ひどい嘘。

思わず、恨めしい晴天を仰ぐ。

薄い雲がせせら笑うように、気楽に漂っている情景が、視界いっぱいには広がる。その背後には、愚かしいくらいに活きのいい太陽。嫌らしい雲は陽光を遮らない。それと、素知らぬ顔の青い空。ますます穢に障る。

悔しくて舌打ちをしそうになるのを堪えて視線を戻す。舌を打ち鳴らしたところでどうにもな

らない上に、惨めになるのはわかっている。

戻した視線の先には、ついさっきまでのボクと同じように、ぼうっと突っ立ったまま、空を見上げている人が見えた。

地味な色合いの服を着ていて、頭頂部のちょっと寂しい、初老の男性。

彼は睨んでいるのではない。だらしなく口を開けたまま、見入っている。

見つめている。

いつも通りの、ありがちな、真っ青な空の色を？

眩しい光と熱を帯びて、無邪気に燦々と輝く太陽を？

人を馬鹿にしたような、薄笑いを浮かべた白い雲を？

違う？

ああ、と男性の口から湿っぽい吐息が洩れた。

——もしや。

ボクは、人がそんな反応をするときをいくつか知っている。

きれいなものを見たとき。

または、不思議なものを見たとき。

あるいは、どうしたらいいかわからないとき。

——咲いている？

ボクは慌てて空を見上げた。

素知らぬ顔の空、無邪気な太陽、せせら笑う雲……。

さっきと何も……。

やめよう。

視線を再び戻したボクは馬鹿らしくなって、男性の隣をさっさと通り過ぎた。男性はボクという存在が横を通り抜けて行ったことに全く気がつかない様子だった。その代わり、すれ違いざまに声にならない声を微かに上げた。

男性は何もない空を見上げたまま、嗚咽した。

「やあっと来たね」

病室の姉はベッドにどっしりと腰かけて、ボクを待ち構えていた。

どっしりというには少々痩せ気味ではあるし、そのか細い腕には痛々しい点滴の針が刺されているが。泰然たる態度が「どっしり」なんて重量感のある言葉を導き出したんだろう。

姉はわりかし元気であった。元気に振る舞うだけの気力があった。それは喜ばしいことだし、ボクはようやく胸をなで下ろすことができた。けれどもどうしても、この病室というやつは、ボクの体にめぐる血液に、神経に、嫌な刺激を与えた。

「紫苑、おみやげはないの？」

「ない。微塵もない」

もう帰る、とボクは言葉を続ける。

「ええっ、もう？ 一分もいなかったじゃない」

「元氣そうだし長居は無用だろう」

「無用でない。元氣だから、話がしたいのよ。ほら、紫苑。手土産がないなら土産話をちょうだい。この一週間、森田さん検温でえす、はーい、とか、看護師さんとそんな味気ない会話ばかりだったの。あとはお父さんと、まあ、そこそこの会話。ね、わかるでしょ紫苑。あんたなら耐えられる？」

よく喋る姉である。しばらく会わずにいたので忘れていたが、姉はよく弁の立つというか、勢いが止まらず口のまわる質なのだ。そんな姉にとって、確かに話し相手がいけないのは苦痛であるかもしれない。何となくわかる気はする。

よいしょ、という掛け声と共に、姉はベッドに入った。

「わかったら何か。話題。あ、友だちでできた？」

「またその話か。前も同じような話題が出たし、ボクは完璧に答えたぞ。忘れたのか。姉さんがワイドショーの司会だったら視聴率は暴落だ」

「打ち切りね。いいわ。話題を変えましょう。何せ新鮮で自然な会話に飢えていて、よくわからないの。紫苑、次はあんたが話題を決めて」

寝転んだ姉はそう言うのと、首を動かしてボクに傍らのパイプ椅子に座るように促した。

「え。うーむ……今日は暑かったね」

ボクは腰かけながら話題を振る。姉の要望に、いつの間にか従ってしまっている。

「そう。外に出てないからよくわからないわ」

無言。姉の返事が珍しく短い。

「もうすぐ夏は終わるのに。じりじりと肌が焼かれて、嫌だった」

ボクは話を続けた。姉が黙ってしまうのが何だか怖い。

「そう。もうすぐ夏が終わるのね」

「恨めしくて、元気なお日さまをねめつけてきた」

「まあ。馬鹿ね」

姉の白い唇が歪んだ。

「同じように空をねめつけている人がいた」

「あんたと同じように？ 嘘だ。人間以外にケンカ売る馬鹿が他にいるっての？」

いよいよ姉は大口を開けて笑った。

「いた。ケンカは、売ってなかったよ。ボクだって売ってない」

「……へえ。なんでお空なんか見てたんだろ」

「わからないけど。ボクは一瞬、花を見てたんじゃないかと思うんだ」

花？

姉はそう一言こぼすと、電池切れのロボットのようにぴたりと動きを止めた。さっきまで笑って歪んでいた唇も、真一文字に結ばれた。

「そうだよ。なあ、姉さんは何か憶えてない？ 空に、花が咲いたこと。父さんが何度も話して

いただろ。雲を土に、空を水に、生きとし生きるものすべてを陽光にして……」

急に大人しくなった姉。眉を顰め、顔には影が落ちる。

「なあ、おい、姉さん」

「怖いわ。紫苑」

「え」

私、その話、嫌いなもの。

「その話が本当なら、次に咲くのは、私が死んだときなの」

あれは人が死んだときに咲くのよ、きつと。

蚊の鳴くような声だった。しかしそれはコップに注がれる冷たい水のように、ボクの頭の中へと簡単に流れ込んでくる。

「そしてね、その話は本当なの。紫苑」

私、見たんだもん。空いっぱい広がる、一面の——。

ボクが一番、避けるべきだった話題なのに。

嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ。

姉さんの肌が白い。こんなに白かったっけ。血の気がない。生きた人間の色じゃない。

まるで、棺おけにすっぽり収まった、ああ、収まって、体を焼かれて天に昇った、

「おかあさんのときみたいに！」

——母さんのよう。

*

休みが明けて、しばらく経つ学校。時計の針はゆっくりと進んでもどかしい。退屈な授業中に覗く窓は開かれていて、青空を切り取る。今日も快晴。

春の晴天は淡い色合いの、優しい顔。風も穏やかで、心地よい。

僕はあくびを噛み殺して、黒板に書かれた文字の羅列を、適当にノートに書き写した。進級してから、ますます授業が退屈になった。学力がついていけなくなったのかもしれない。それもそうだ。高校生活も、あと一年もしないで終わる。のんびりしていた自分が悪い。

しかし今日に限っては、己の学力を抜きにしても、退屈なものには他にも原因があった。

今日は彼がいないのだ。

紫苑は身内の人が亡くなって、忌引きであるらしい。朝に出席を取っていた担任は気まずそうにそう言った。詳しくは伝えられなかった。

今思えば、紫苑は夏の終わり頃から、いつも以上に落ち着かない様子であった。

相変わらず話しだすと延々と口を動かすマシンガントークであったが、その内容がいつも以上に奇怪で、例えば人は死んだらどこに行くのだろうか、とか、なんで人が死んだら花が咲くんだろうか、とか、そんなことを口走った。人が死んだら花が咲く。この言葉の意味がわからず、色々と質問をしてみたところ、いつか話した「天に咲く花」のことらしいとわかった。彼は未だ

にその存在を信じていた。信じてもらいたがっていた。そして何度も何度も、繰り返して話した。信じろと訴えた。

花が咲く、花が咲く、天に、空に、咲く……。

そのうち僕の返事も、だんだん決まったものになっていった。

——「信じたところで何になる」

——「慰めに」

——「だから、誰の。お前の？」

——「それは、わからない。でも、もしも和樹、お前が、あの花を、空一面に咲く花を見ること
が叶ったのなら……」

紫苑はいつもそこで声を詰まらせた。僕は困惑した。こんなにも苦しいものごとを訴える紫苑は珍しかった。少なくとも、紫苑が嘘ではないと思っていることだけは、はっきりとわかって
いた。

信じたふりをして話を合わせて適当に相槌を打つのは簡単だ。相手が紫苑でさえなければ。話
すのが好きで、聞いてもらうのが好きで、一方的に口を動かし呪文みたいに不可解な言葉を、マ
シガンのごとく絶え間なく撃ち込んできて、そのくせに、僕の顔を窺う、紫苑でさえなければ。
ば。

この目で見ない限り信じられない、と僕はつい最近、いつもと違う返事をした。僕なりの、正
直である一方で、精一杯気を遣った返事だった。

紫苑はほんの一瞬だけ沈黙すると、溜息を吐くように、そうか、と呟いた。

——「夏の終わり、何にもない空を見ている人がいたんだ」

——「へえ」

——「病院、で。ボクには何も見えなかった。ただの、夏の匂いを残したままの、嫌になるほどの青空しか。でも、その人にはきっと……。雲を土にして、空を水にして、生きとし生きるものすべてを陽光にして、そして、しまいに、し……。死んだ人の、魂を、肥料、かな、わからないけど、栄養にして、立派に、咲き誇って……」

慰めるんだよ。

だから、和樹、お前に見えないのなら、仕方ない。いつでも見えるものじゃない。見えるのがいいことではない。目に見えないと信じられないと言うのなら……。

やっぱり、信じなくていい。

そう言い捨てた紫苑の顔は曇っているように見えた。諦め、という感情であろう。僕は初めからこう答えればよかったのだと後悔する一方で、小さなトゲが胸に刺さるような罪悪感を覚えた。

紫苑を傷つけた。

真っ先にそう思った。けれども、謝るほどひどいことをした、という気はしない。何もなかった顔をして、いつも通り彼に接するのが一番だと、そう信じることにした。彼もそんな僕の選択を飲み込んだらしく、がらりと話題を変えて話し始めた。学校の近隣の家で飼われている犬が、この間野良猫にいじめられていたという話を、彼独特の視点から、止まることなく語り続けた。

口調や声音は相変わらずだったが、どうしてもその表情は淡々としていて、機械のような冷たさを残していた。

以前の会話を取り戻した。取り戻してから程なくして、今日に至る。

現在の方へと意識が返る。未だにここでは授業中。けれども時計の針は、遅いけれどもしっかりと進んでいた。知らない間に、新たな単語が黒板に書き加えられている。またメモを残そうと、ノートに目を遣る。

ページの、ちょうど真ん中辺り。最後にメモを残した部分。そこに。

うす紫色の、紙切れ？

手に触れる。

それは、生きていたものの手触り。水気を帯びていて、ひんやりと冷たく、ほのかに香る。

うす紫色の、花びら。

窓から流れ込む生ぬるい風が、僕の髪を揺らす。まるで誰かの指先に撫でられたかのような感覚だ。

誰かの――。

慌てて窓の方に目を遣る。

そこには何も無い。

さっきと同じ。淡い色合いの、春の青空。今日も、快晴。

先生が僕の名前を呼んだ。その声には、苛立ちが露わになっていた。そしてさらに先生は、よそ見をするんじゃない、と続けた。

すみません、と軽く頭を下げて、僕は袖でそっと顔を拭いた。注意を受けることに耐性がないわけではない。ぼんやりしているのはよくあることだ。

でも――。

胸の詰まる、思いがした。

*

和樹。

お前には謝らなければならない。

この景色をお前に信じてほしかったのは、悲しくて恐ろしくて、そのくせに、悔しいほどに綺麗な、ああそうとも、綺麗なこの景色を、お前と共有したかったからに他ならない。

今ならわかる。

ひどい我儘だったと思う。甘えていたと思う。

言葉にするのが、認めるのが、嫌だったんだ。

お前は、ボクの友だちであるから。お前は、ボクの言葉を、すくい取ろうとしてくれるから。お前に今見えているのが、平凡な晴天であればいい。

さようなら姉さん。父さんは二度と見たくなかったと、めそめそ泣いている。そして綺麗だと言って少し笑っている。父さんはもうすぐ、大丈夫になれる。ボクも、きっと大丈夫になれる。いつものボクに戻るよ。そうしたら、あいつに、謝って来よう。

あいつはきっと、困った顔をする。でも、それでいいんだ。

ボクは最後に、自分に語りかけた。

雲を土に、空を水に、そして、生きとし生きるものすべてを陽光にして、咲き乱れる花。

これらは全て、別れの証。

けれども。

泣くな。嘆くな。悲しむな。

そうだ。

見よ。

命は芽吹き、
天もまた萌えるのだ。

(文学部文学科三年)

選考を終えて

東光原文学賞総評

選考委員長 跡上 史郎

今回、東光原文学賞は、記念すべき第十回を迎えました。応募総数は去年をやや下回りましたが、質的には前回に勝るとも劣らない力作の数々が寄せられました。

文学の衰退がまことしやかに囁かれて久しくなります。本も売れないそうです。しかし、人が物語を語ったり書いたりすることへの切望は、かえって強まっているようにも思われます。

大賞「この子の物語」は、死に向かいつつある愛犬、不調を抱えた主人公とその家族の回復を描いた意欲作です。審査委員全員が一致して推した唯一の作品でした。命というとても重いテーマに正面から挑んでいます。しかし、単に命の大切さを訴えるありがちな話とは一線を画しています。現在の苦悩を過去との因果関係で描くプロットが実に適切で、作者が丁寧な文章を練り上げた様子が伝わってきました。命に関するいわく言いがたい微妙な問題を、流さず、こまかさず、安易な結論を出さず、手探りで書きながら、粘り強く考えたのだと思います。

優秀賞「愛別離苦の計略」は、不可思議な事件を合理的に解決していくことを目指した本格ミステリーの結構を持っています。また事件に関わる人物たちの心理も丁寧に描くことを心がけた

スタンダードな作品で好感が持てました。

優秀賞「天萌ゆる」は、詩のような物語で、選考委員会でも映像的な美しさや色彩感覚が高く評価されました。常識人の語り手と超常的な現象に属する語り手が出てきますが、前者を読者との媒介役として主軸に据えると、技術的に安定するかもしれません。

優秀賞「痛み」は、若い女性による一人称の語りが成功しています。話し言葉と書き言葉のちょうどよい配合が実現されていると言えるでしょう。好きな先輩への夢想と、それが破られる現実への引き戻しが繰り返されるシーソーのようなバランスも絶妙です。

他に惜しくも入賞を逃した作品もありました。また、思いが余って、自分で自分の書くものをコントロールできていない印象を与えました。しかし、表面を整えるだけのものと違って、将来性を感じさせるものでした。自分が何を言いたいのかわかっていて、それを何かに役立てようというのであれば、論文を書けば良いのです。文学はそのような営みとは異なります。役に立つとか立たないとか、成長できるとかできないとか、力がつくとかつかないとか、そういった功利的な価値観を超えて、ただ自分が表現しなければならぬものを書く。止むに止まれず書かずにいられないものを書く。自分でも何が言いたいのか半ば以上はわからないのにそれでも書く。それが文学の存在意義ではないでしょうか。

投稿者の皆さんは、まずは、自分の作品を好きになって、何度も何度も反芻し、納得がいくまで書き込んでみてください。選考委員の思惑を超えるようなものが生まれるかもしれません。拍手したくなるような作品も素晴らしく思う一方、沈黙させられてしまうような作品との出会いも

また待ち望んでいます。

● 跡上史郎（あとがみ・しろう）

熊本大学教育学部准教授。専門は日本近・現代文学。鹿児島県出身。

熊本文学隊代表世話人として「いま石牟礼道子をよむ・平松洋子×枝元なほみ×伊藤比

呂美」（二〇一七・一一、四、於Denkikan）の企画・運営等。

その他最近の仕事は、『漱石辞典』（共著・小森陽一他編、翰林書房、二〇一七）、「宮崎

駿になった夏目漱石——『草枕』復活プロジェクト」（『国語教室』一〇六号、大修館書

店、二〇一七）、「澁澤龍彦『高丘親王航海記』から見る三島由紀夫『豊饒の海』（『三

島由紀夫研究⑧』鼎書房、二〇一八）等。

講評

選考委員 松岡 浩史

私たちの認知的な世界は言語によって切り取られます。ところが、言語と言語の間にはスリット（隙間）があつて、そこには誤解や用いる人間の感性がたゆたう余地が生まれます。さらに、言葉そのものが指示対象を正確に表しているかどうかも疑わしい。言語学では、フェルディナン・ド・ソシュールが言語の持つ文字・音といった感覚的側面（能記）と意味内容（所記）との間に必然性がないことを明らかにしています。つまり、私たちは言語を使ってコミュニケーションをとろうとしますが、ひょっとすると本質的には何も分かり合えていないのかもしれない。夏目漱石の『こころ』では、Kは壁一枚隔てて眠っている先生のすぐそばで、何も言わずに一人で死んでいきます。どうやらわたしとあなたでは、まったく世界の見え方が違うらしい。まさに文学というのは言葉によって世界を切り取る行為なのです。

今回の応募作のなかで一次選考を通過した九作を読みましたが、「死」の問題を扱った作品が多かったことが印象的でした。私たちは熊本地震も経験しましたし、愛する者の死が人生において大きな出来事であることは言うまでもありません。応募作の多くがテーマに「死」を選んだことも首肯できます。

純文学／大衆文学の別を問わず、小説は心の冒険（ドラマ）を描こうとします。しかし、冒険

であることは、ただちにテーマが壮大であることを意味しません。何の変哲もない日常が、ある人間にとっては極めて劇的であり得る。作者の切り取る世界においては、日常に潜む非日常（「狂気」と言ってもいいのかもしれない）こそが真実の香りを発している場合があるのです。したがって、小説における「死」というテーマは、重く普遍的なテーマでありながら、一方で物語のプロットを作るうえで選びやすい平凡なテーマであると言うこともできるでしょう。言い換えれば「死」を描く場合、愛する者の喪失や悲しみを越えたなにか、を表現することが求められると言ってもいい。テーマが普遍的であればあるほど、そのテーマをどのように描くのか、という表現手段の妙が問われることとなります。

大賞作の「この子の物語」は一見、愛犬の死という死生の問題を扱った物語であるようで、実は主人公の心の葛藤と成長を描いています。衰弱した飼い犬が死ぬまでの数日間の過程を丁寧に描きながら、「ぼく」の心の秘密と世の中のかかわりあいを描きこまれていく。主人公は、「『床ずれ』という言葉、なぜこんなに軽くて、問題なさそうな響きなの」と言葉の持つ響き（能記）やその言葉が示すイメージ（所記）と現実との間に屹立するギャップに戸惑います。そしてその矛盾は、潔癖症である「ぼく」が使う「プッシュ式のハンドソープ」といった無機質な存在と、死にかけた犬が「ひゅん、ひゅん、ひゅん」と鳴き、「皮膚が擦れ、裂け、なげなしの肉がえぐれてい」く描写の感覚的臨場感の関係にも見出すことができるでしょう。私たちが信用するに足る現実とは何なのか。潔癖な言葉は信用できない。異臭を放つ瀕死の犬こそが真実なのではないか——。このように、作者が切り取る世界におけるリアリティの問題は、そのまま作品のテ

マである「偽善者」へと導かれていきます。

戦争や災害、死といったテーマは日常に突然訪れる劇的な出来事であるわけですが、実は心の中には、一人ひとりが抱えている、日常に潜む劇的なナラティブ（物語）がある。周りの人間から見れば普通に生きているように見えても、実は本人の心の中では、世界が覆されるような出来事が起きているのかもしれない。

言語は世界を切り取るツールです。文学賞への投稿を志す皆さんが文学によって表現するドラマティックな日常の世界に今後も期待します。

●松岡浩史（まつおか・ひろし）

熊本大学大学院人文社会科学研究所（文学系）准教授。専門はシェイクスピアを中心とする英米演劇。

著書・共著に『文学と歴史の曲がり角―英米文学論集』（英光社、2014）、『ヘルメスたちの饗宴』（音羽書房、2012）、『シェイクスピアの広がる世界―時代・媒体を超えて「見る」テクスト』（彩流社、2011）、『世界の鏡としての身体―シェイクスピアからアニメーションまで―』（身体表象文化学会、2008）などがある。

講評 ワイルドサイドを歩け

選考委員 岩瀬 茂美

「ワイルドサイドを歩け」は、二〇一三年に亡くなったロック歌手ルー・リードの代表曲である。ささやくような低い声で淡々と物語が紡がれる。ルー・リードが率いたバンド「ヴェルヴェット・アンダーグラウンド」のデビューから半世紀。後進のミュージシャンに与えた影響は計り知れない。ロック歌手でもある作家の町田康さんは、追悼エッセーで「ルー・リードのように誰も歌えない」と書いている。

「やる気なさそうな、だるそうな感じで歌っているのだけれども、むっさ迫ってくる。と同時に、むっさ引っ張ってくる」。その歌い方は、ほかの歌手にとっても魅力的で、誰もがルー・リードのように歌いたい。しかし、うっかり真似をすると失敗する。それは「ルー・リードただひとりに許された歌い方なのだ」と町田さんは考察している。

文章を書くこと、小説を書くことでも同じようなことが言えるのではないか。好きな作家の文体の模倣から始まる一步は少なくないだろうが、そのままでは誰もが行き詰まる。最終的には、自分なりの言葉を見つけるしかない。書くことは自分自身を見つめることでもあり、そうするこ

とで、自分だけの道も見つかるとははずだ。

昨年引き続き、東光原文学賞の選考委員を務めることとなった。新しい書き手との出会いは毎回楽しみである。自分を見つめる姿勢、新しい表現の模索、文章にあふれる熱量……。そうしたものを発見し、何よりも、どこか遠くまで連れていくような物語の力に浸りたい、と思う。

大賞「この子の物語」は、文体に変拍子のリズムと、不思議な感触の魅力な表現があって、独特な世界観を構築している。主人公の内面を徹底的に見つめ、丁寧に描ききる姿勢が際立っている。

優秀作「天萌ゆる」は、余白を残した詩的な表現が特徴的で、生と死という主題を映像的に描く。二人の語り手によって共有される主題のイメージが色濃くなっていく展開は、村上春樹作品の「僕」と「鼠」のようで面白い。

優秀作「痛み」は、等身大の恋愛小説で読後感が良い。心の躍動をそのまま張りつけたような文章がみずみずしい。過剰な自意識ともろさが丁寧に描かれている。

優秀作「愛別離苦の計略」は、古典ミステリーの骨格を踏まえた構成。文章に読ませる力があり、トリックに重なる心理描写にも熟度を感じた。

このほか入選作にはならなかったが、人の悪意に深く踏み込んだ「鷹と薔薇」が印象深かった。ざらりとした後味の悪さが極めて現代的な作品である。気軽に楽しめた『「エクス・ツアー」へようこそ』は、物語に引き込む巧みな文章力があつた。

いくつかの作品には、自分なりの切実な言葉を絞りだそうとする試み、自分なりの物語をつく

り上げようとす強い意志を感じた。

フェイクニュース、忖度（そんたく）……。そんな言葉があふれる情報社会の中では、現実の出来事の輪郭があいまいになり、不確かなもので覆われていくような感触がある。映画「ブレードランナー」の原作者として知られる作家のフィリップ・K・ディックは生前、小説家として目指しているのは「見た目だけの現実のベールを突き破り、真の真実に迫ること」と語っている。優れた物語には、不確かな社会に多角的な光をあて、新たな視点を提示する力もあるのではないか。今後、そんな作品と出会えることも期待したい。

書き続けることは困難な道でもある。それでも自分自身と真摯（しんし）に向き合い、長く、物語を書き続けてほしい。それは、これからの人生をより深く生きることにもつながる道なのだと思う。

● 岩瀬茂美（いわせ・しげみ）

熊本日日新聞社編集委員兼論説委員。1963年、八代市生まれ。1988年、熊本日日新聞社入社。社会部、天草総局、編集本部、荒尾支局などを経て、2007年編集本部次長、11年社会部次長、13年同次長兼論説委員。14年文化生活部次長兼論説委員。17年3月から現職。主な連載企画に「水俣病40年」「水俣病小史」「水俣病は終わっていない」（平和・協同ジャーナリスト基金賞特別賞）、「30代の地図」「熊本地震 連鎖の衝撃」など。

第十回熊本大学東光文学賞作品集

発行日 二〇一八年三月三十一日

編集・発行

熊本大学附属図書館

〒八六〇―八五五五

熊本県熊本市中央区

黒髪二―四〇―一

印刷 株式会社かもめ印刷



To Mr. Soseki

